

「子どもの参加を促すガイド」

子どもに関わるプログラムを実施しているみなさんへ

「子ども参加」は、今日、取り組むべき大きな柱の一つです。
「理念に、子どもの権利、子ども参加を掲げていますか？」
と問えば、多くの団体が「掲げている」と
答えるのではないのでしょうか。

「どのように子ども参加が行われていますか？」と問えば、
「子どもたちが学校づくりに参加している」
「子どもの意見をイベントに反映させている」
「子どもたちが地域の問題に取り組んでいる」
などなど、さまざま挙がることでしょう。

「その参加と、理念で掲げる参加との間に
ギャップはありませんか？」との問には、どうでしょう。
本ガイドの制作に携わったメンバーの多くは「あります」と、
自らが所属するNGOについて答えています。

理念では掲げているが、現実には十分でない。
この差を縮めたい。
これが本ガイドをつくった動機であり、同じ問題意識を持つ
みなさんに本ガイドを捧げます。

私たち大人、NGO が意識を変えるために

どうすれば、子どもの主体的な参加が推進できるのか。

「子どもの社会参加に普遍的なモデルはない」と、

『子どもの参画』^(*)の著者、ロジャーハートは同書のまえがきで書いています。

これに異論がないのは私たちだけではないでしょう。

現場に向き合う実践家にとり、よくできたモデルを提示されたからといって、心が動かされるものではありません。

心を動かすのは真摯に粘り強く行われている実践そのものであり、その実践こそが、「自分たちにもできるかもしれない」という勇気を与えます。

本ガイドは、子ども参加の実践の事実を提示し、

そこから私たちが何を学び取ったかをまとめました。

大人がつくった、大人が変わるためのガイドです。

みなさんの参考にしていただければ幸いです。

2009年3月

教育協力 NGO ネットワーク JNNE

(*)参考文献

子どもの参加を促すガイド

目次

ガイドの前に

- 「子ども参加」の登場人物とは誰でしょう？ 4
- 「子ども参加」といいながら、見えているでしょうか？ 5
- パートナーであることの発見が、壁を崩す。 6

part1 理論編 「子ども参加の推進にあたって」 7

- 1. なぜ、子ども参加か？ 8
- 2. 子どもの権利と参加 9
- 3. 子どもの発達と参加 10
- 4. 集団参加とグループワーク 12
- 5. 参加のはしご 14
- 6. 形だけの参加 16
- 7. NGO活動と子ども参加 17

part2 事例編 19

- 子どもたちによる社会参加 バングラデシュ 20
- 子どもたちによる社会参加 ネパール 26
- 子ども参加を促す啓発プログラム フィリピン 33
- 子ども参加を促す啓発プログラム インド 39

実践ガイドは、事例から重要と考えられるポイントをピックアップし、その解説とともに、実践的な情報を加えて構成しています。part2 と part3 は相互につながりあっており、あわせてお読みください。

part3 実践ガイド編 44

1. 組織と人を意識づける 45

[組織の準備]何から始める？ 46

取り組む前の注意 46

1-1 リーダー層、マネジメント層 47

1-2 スタッフ 47

1-3 スキル向上への姿勢 49

[地域に対して]大人の意識を変えるには？ 51

1-4 子どもの力を認め、受け入れる 51

2. 事業を進める 54

2-1 準備 56

2-2 アセスメント 61

2-3 実施 62

3. 子どもに働きかける 66

3-1 研修を通して 67

3-2 実践を通して 72

練習問題 78

参考文献 82



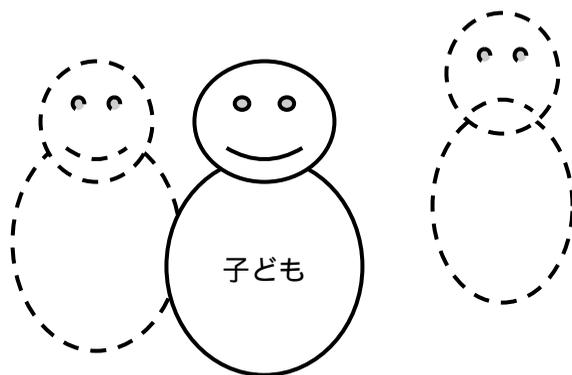
ガイドの前に

「子ども参加」の登場人物とは 誰でしょう？



「子ども参加」をめぐる、たくさんの大人が登場します。それぞれ登場人物は、子どもという見えなかった参加者の実力を、いかにして認め、「このテーブルに、席が用意されてこなかったことがおかしい」と感じるようになるのでしょうか。抵抗を続ける人もいるでしょう。現地を支援するNGOという大人にとってもまた、自分を変えるチャンスといえます。

「子ども参加」といいながら、 見えているでしょうか？



「子ども参加」と一言と言っても、子どもは、それぞれ、さまざまな状況にあります。「子ども参加」の道のりは、NGO にとって、子どもを発見する過程であり、支援対象とする社会の構造をより深く知る機会となるでしょう。それは、人間が人間らしく生きる持続可能な社会をめざす、NGO のよきパートナー発見のプロセスなのでしょう。

パートナーであることの発見が、壁を崩す。



「子ども参加」の実践例

子どもによる地域調査から託児施設を開設
スラムの地域開発の意思決定に子どもが参加
子どもによる早婚防止の啓発活動で実績を上げる
子どもが子どもに「識字クラス」を実施
子どもが、不就学の子どもの親に働きかける
子どもたちが教員・保護者と学校改善計画に参加
教員の出勤状況、体罰を、子どもたちがチェック

(事例を参照してください)

子ども向けプログラムの成果の例

子どもが自分に自信をつけた
大人に自分の意見が言える子どもが増えた
子どもが主人公になれる機会を提供した

子ども向けプログラムは多くの実践があります。一方、子どもが意思決定にまで加わるには様々な壁が立ちふさがっています。その壁を崩すのは、日々の現場の実践を通して、子どもはパートナーであると大人が実感することにあるでしょう。それを見逃さないのが、支援するNGOの役割といえます。

Part1

理論編 子ども参加の推進にあたって

1. なぜ、子ども参加か？
2. 子どもの権利と参加
3. 子どもの発達と参加
4. 集団参加とグループワーク
5. 参加のはしご
6. 形だけの参加
7. NGO活動と子ども参加

1. なぜ、子ども参加か？

子どもがいない公園

NGO がさまざまなプロジェクトを計画したり実施する上で、なぜ子どもの参加が必要なのでしょう。

例えば、日本には児童公園や児童遊園という、もっぱら子どものために作られた公園が数多くあります。子どものための遊具があるにもかかわらず、子どもたちはあまり来ません。

一方、同じ日本で、子どもたちが駆け回る姿で溢れ、子どもの歓声でうるさいばかりの公園もあります。それはNPOが行政とともに運営している「プレイパーク」と呼ばれる公園です。通常の公園よりも設備は貧弱です。ただの空き地で子どもたちがタイヤをころがしたり、木に上ったりしている、というような所もあります。プレイパークが他の公園と違うのは、「してはいけません」という禁止事項がないこと、そして、子どもたちを見守るプレイリーダーがいることです。

子どもの声を聞く

閑古鳥が鳴いている公園と、子どもの嬌声に溢れる公園との違いは何でしょうか。それはひとえに設置者が「子どもの

声」に耳を傾けて、子どもの立場で公園を設計し運営しているかどうかです。プレイリーダーは、子どもたちを遊ばせる指導者ではありません。むしろ、何もせずに子どもたちの動きを見ている、万が一の事故に備えている存在です。しかし彼らは、常に子どもの声を聞き、子どもの様子を見て、公園の管理運営に生かしています。だから子どもたちのニーズに合った公園の運営ができ、その結果としてますます子どもたちが遊びにくくなるようになるのです。

国際協力NGOによる子どもに関わるプロジェクトは当然子どもたちの利益のために行われます。ところが、その結果が子どものためになるかどうかは別問題です。善意で子どものために行われたプロジェクトが効果をあげないということもよく聞きます。

子どもという当事者を抜きにしてプロジェクトが行われてはいないでしょうか。「子どもの声に耳を傾ける」ことこそ子ども参加の第一歩です。

地域のプロジェクトで子どもを直接対象としていないもの、例えば飲料水の確保、道路作り、コミュニティ・センターづくり、などでも、実際に子どもの生活に大きく影響するものが数多くあります。「小

さな住民」である子どもの声を反映させることがプロジェクトの成否にかかわるといっても過言ではありません。

2. 子どもの権利と参加

子どもの権利条約

子どもたちが自らの生活に関する事柄に基本的に参加する権利がある、と認められるようになったのはそう昔のことではありません。国際的には1989年に国際連合で批准された「子どもの権利条約」以来です。子どもの権利条約には、子どもに関する4つの権利が細かく記されています。[生存の権利][保護の権利][発達の権利]と[参加の権利]です。

参加の権利としては例えば、

第12条 意見表明の自由

第13条 表現・情報の自由

第15条 集会の自由

第31条 遊びと文化的、芸術的
生活への参加

などの条文があります。

子どもの権利としてはこれら「参加の権利」は4つの中で最も新しく、この権利条約で初めて明文化されたといってもよいでしょう。

そもそも子どもの権利ということが真剣

に考えられるようになったのは、20世紀の二つの世界大戦がきっかけになっています。大人が引き起こし多くの子どもを死や不幸に追いやった第一次世界大戦の反省から、1924年には「子どもの権利に関するジュネーブ宣言」が出されました。そして、再び子どもたちに多大な惨禍をもたらした第二次世界大戦の後に成立した国際連合が1959年に「子どもの権利宣言」を発表したのです。

これらの宣言の中で子どもの3つの権利(生存、保護、発達)については明確に位置付けられていました。しかし、当時はまだ「子どもは保護され、教育される存在」という子ども観が根強く、子どもの参加の権利という観点は希薄でした。

子どもの権利宣言の20周年に当たる1979年が「国際子ども年」と定められ、法的な拘束力のない「宣言」ではなく、各国の国内法規に拘束力をもつ「条約」を制定する作業が始まったのです。そして、10年後の1989年に国連において子どもの権利条約が採択されたのです。2008年現在、ソマリアとアメリカ合衆国を除くすべての国連参加国がこの条約を批准していて、この種の条約としてはもっとも締約国が多い条約となっています。

参加する権利の進展

それでは子どもの権利条約によって、子どもたちの参加は飛躍的に進んだのでしょうか。確かに権利条約によって、子どもたちには意見を表明したり、参加したりする権利がある、という認識は広がりつつありますが、実際の場面ではさまざまな抵抗やとまどいが大人の側に見られます。子どもの参加を保証するには、まずは大人の側の意識が変わらねばなりませんし、さらに子どもの参加を促すためのスキルや環境整備も必要なのです。

世界各国の子ども参加の状況を視察して、その成果を『子どもの参画』（参考文献）という本にまとめたロジャー・ハートは、「民主主義はもうしっかり確立できていると自認している北半球の国々よりも、民主主義にいま目覚めつつある国々で、子どものコミュニティ参加がより進んでいるように思われる。」（R・ハート『子どもの参画』萌文社、2000年、p.xii）と述べています。確かに、伝統的な地域社会が崩れつつある日本の現状よりも、地域での子どものケアが生きているアジアの国々の方が、子ども参加が進みやすいということがあるかもしれません。国際協力に携わる者は、子ども

参加は日本でもアジア諸国でも共通の課題である、という認識はもっておいてよいでしょう。

3. 子どもの発達と参加

子ども参加とは？

参加という言葉にはとても広い意味があります。「地域の運動会に参加する」といった場合でも、いやいや参加してただ単にその場に「居る」だけのこともあれば、選手として勝利をめざして積極的に活躍することもあるでしょう。あるいは、運動会の企画から運営まですべてのプロセスに参画する場合もあるでしょう。

参加度がもっとも低いのは、ある集団に単に「所属」しているという状態です。所属はしているけれど、とりわけ役割や責任があるわけでもないという段階です。次に、集団に所属していて、集団の中での役割を果たす「役割参加」という段階があります。この場合は、集団が自分に期待する一定の役割を担っています。

さらに、周囲の社会に関わり、働きかけていくという「社会参加」の段階があります。これは集団を基盤としながらも、より広い社会にコミットして、社会の中で

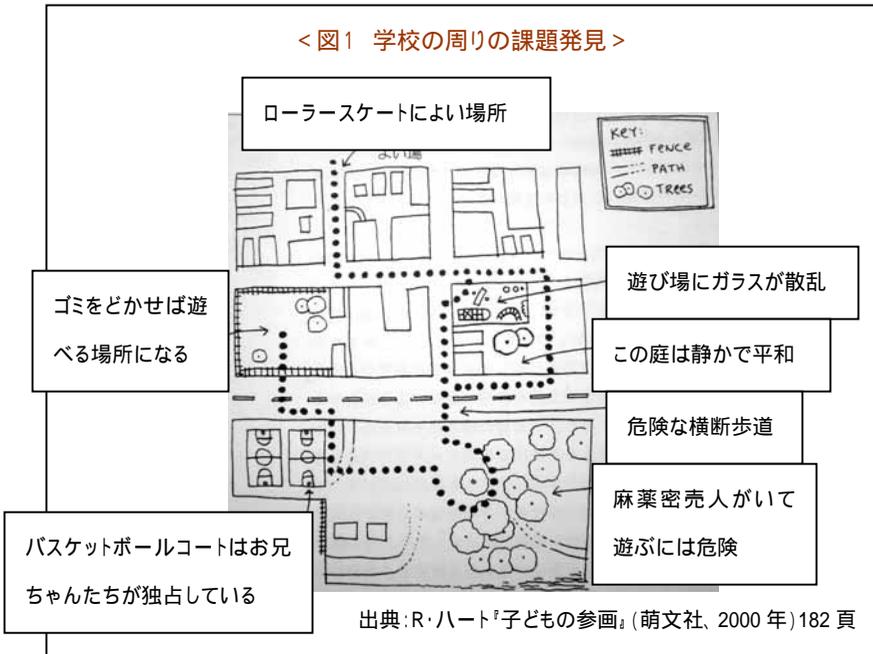
役割を果たしたり、社会そのものを変えていくような参加のしかたです。本ガイドでいう「子ども参加」は、子どもの集団参加を基盤としながらも、広く社会に働きかけていく「社会参加」を主に扱っています。

参加の「場」という観点から、別の分類方法もあります。それは、家庭への参加、学校への参加、地域への参加、職場への参加、国への参加、地球社会への参加、というように同心円状に広がる参加の場の考え方です。子どもの発達段階によって、次第に活躍の場が広がることを想定しています。しかし、現在ではマ

スメディアの発達により、子どもたちは幼い頃から世界の出来事を知るようになっていて、子どもの社会認識が同心円的に広がっていくわけでは必ずしもありません。

いつから参加が可能か

子どもの参加を集団参加と社会参加に分けて考えてみましょう。集団への参加ということであれば、3歳くらいから可能です。社会参加についてはどうでしょう。ロジャー・ハートの『子どもの参画』の中には図1のような事例が出てきます。これはアメリカの小学生の事例で、学校



の周囲を歩いて周りながら、自分たちにとっての地域の課題を発見する試みです。小学生段階でも、地域の課題の発見とその解決に向けての行動を起こすことは十分可能です。さらに中学生や高校生段階になれば、より広い地域や世界の課題を理解して、関心をもつことができます。

4. 集団参加とグループワーク

子ども中心のアプローチと

子ども参加

「子ども中心のアプローチ」と言ったときに大きく2つの意味があります。ひとつは子どもの自主性を引き出すために大人の「指導性」を重視するアプローチです。ここで述べるグループワークはこのアプローチであり、グループワーカーと呼ばれる集団指導者の役割を重視します。

もう一つのアプローチは、子どもに活動の主導権を全面的に譲ることをめざすものです。次の節で述べるハートの「参加のはしご」は、最終的には子どもが活動の主導権をとって、さらに大人をも活動に巻き込むことをめざしています。最終的な主導権を大人がもつのか、子

どもがもつのかによってアプローチが分かります。

集団参加のための手法

子どもたちの社会参加を促す際に、まずは集団に参加することが基本です。集団の中で、自らの役割を果たしたり、人間関係の基本を学んだり、社会と関わる意識や技法を身につけることが必要です。そのための優れた技法としてグループワークがあります。グループワークとは、子どもたちが集団の中で成長できるように支援するための技法です。グループワークは、もともと19世紀後半の英国社会で生まれたYMCAなどの青少年団体に発展し、その後社会教育や社会福祉の世界で確立した方法論です。

グループの発展と衰退

グループワークの基本は、グループ・プロセスと呼ばれる集団の変遷です。それは集団にも人間と同じように生まれてから消滅するまでの一生があるということです。すなわち、図2のように集団が始まる誕生期、そして発展期、活性期、停滞期、再活性期、衰退期、というような時期があります。

学校のクラスを考えてみましょう。新しい学年が始まったときには、クラスはばらばらです。個人の集合体にすぎなかったクラスでも、次第にお互いが知り合い、同じ活動をする中で、自然と役割分担のようなものが生まれてきます。リーダーシップをとる子、仲間を楽しませるのがうまい子、話を合わせるのがうまい子、二人だけの世界を作っている子、孤立している子、などです。グループの発展期には、こうした子どもたちが次第につながってきます。そして活性期になると、一人のリーダーのもとでクラスがまとまっていったり、あるいはいくつかのグループに分かれていてもそれぞれが連携して活動できるような状態になります。

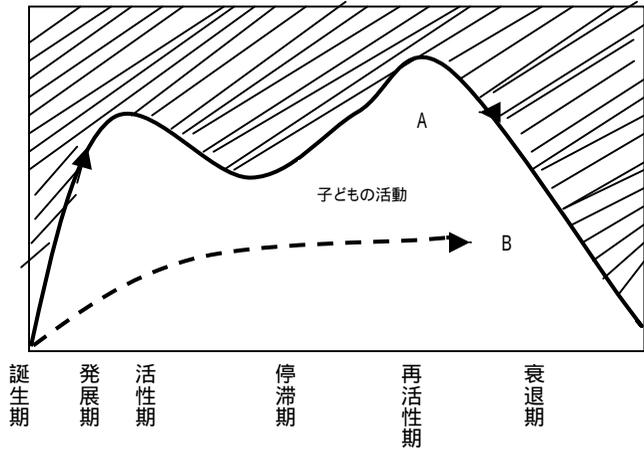
ところが、グループはいつまでも活発なわけではありません。内部対立やマンネリ化してしまい不活発になり、放っておけば、衰退して、最終的には終りを迎え、解散することになります。

発揮すべき指導性

グループワークで大切なのはグループワーカーと呼ばれる、集団の指導者です。NGOの現場の活動では「リーダー」「ワーカー」「ファシリテーター」などさまざまな言葉で呼ばれます。グループワーカーは初めて出会った子どもたちのために、お互いの関係が深まるように働きかけます。この時期、グループ指導者は強いリーダーシップを発揮する必要があります。そして、集団が発展するようにさまざまなしかけをします。また、一人ひとりの個性を見極めて、それが伸びるように奨励します。

グループが発展していくと、次第に子

<図2 グループワークのプロセス>



*斜線部分はグループワークの指導性の強さを表している。

ども自身でさまざまな活動をしたり、問題が起きてもそれを解決できるようになります。集団は活性期に達したと判断してよいでしょう。このときに大切なことは、グループワーカーはリーダーシップを弱めること。もはや、初期段階のように口を出し、手を出していると、子どもたちは頼ってしまい、主体性が伸びません。図のBの状態です。集団は発展せずに低い山(不活発な集団)の状態でとどまってしまう。集団が自ら動いているときにはグループ指導者は「口も手も出さない。求めに応じてアドバイスする。しかし、必ず見守っている(放任にはしない)」といった態度が求められます。

5. 参加のはしご

停滞時のリーダーシップ

集団が自らの力で活動できる内は、グループ指導者は見守るだけで、あまり働きかけをすべきではありません。しかし、グループが停滞したり衰退の兆候が出てきたときには、再びグループ指導者の出番です。なぜ、最近のグループが活発ではないのかを話させたり、グループ内に対立や葛藤がある場合には、それを解決するために働きかけたりします。

こうした働きかけが功を奏すると集団は再び活発になります。

グループ指導者にとってもっとも難しいのが、グループの解散であると言われています。これ以上、同じグループで活動を続けていても却って子どもたちにとって良いことはないと判断したときは、グループ指導者はグループの発展的解消をもちかけます。

このようにグループを指導する者は、グループが今どのような状態にあるのか(発展期なのか停滞期なのか)を常に判断しながら、適切な指導や助言を行う必要があります。グループの活発度とリーダーシップの強さはちょうど正反対の関係にあるのです。

参加にはいくつもの段階があります。それを示したモデルのひとつがロジャー・ハートによる「参加のはしご」です。図3のように参加のはしごには8段階あり、上に行くほど子どもの参加度が高くなっています。下の3段は実際には子どもが「参加していない(非参加)」の状態です。

あるアジアの国で地域改善活動を子ども参加によって推進していくために、NGOがスラム地域で「子どもクラブ」を組織するという架空のプロジェクトを例

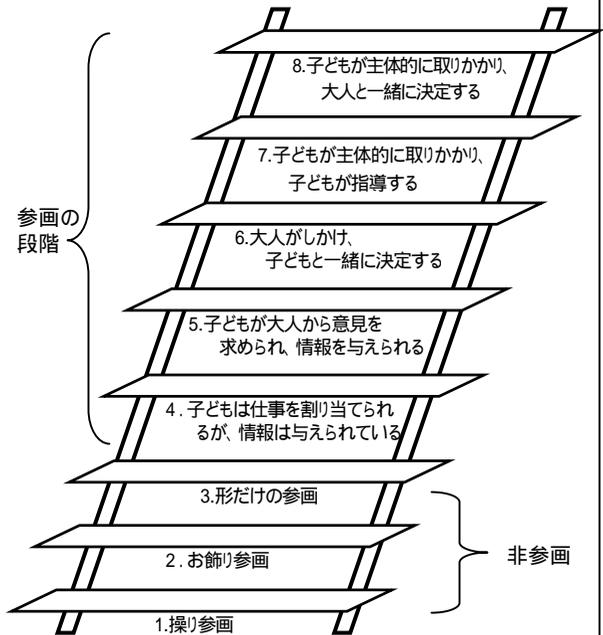
に、参加のはしごを説明しましょう。

実質的に参加している段階としては一番低い「4段 役割参加」から説明しましょう。地域改善の第一歩として、自分たちが住んでいる地域の清掃活動をすると思います。主催者であるN G Oが子どもクラブのメンバーに対して、地域清掃の意義を説明して、子どもたちを班に分けて、清掃活動をさせたとします。これは「役割参加」に当たります。子どもたちは趣旨は理解していて、大人に与えられた役割に沿ってそれを果たそうとします。

次に「5段 意見参加」です。この段階では、子どもは役割を与えられて黙々と遂行するのではなく、自分の意見を自由に言うことができます。清掃のしかたや班の分けかたについて子どもが意見を言うことができ、大人がそれに耳を傾ける段階です。ただし、それを採用するかどうかを判断するのは大人です。

さらに子どもの参加が進むと「6段 共同決定参加」になります。この段階では、子どもから出てきた意見を、大人と子ど

<図3 参加のはしご>



出典：R・ハート『子どもの参画』（萌文社、2000年）をもとに作成

もが一緒になってじっくり検討して、お互いの納得の上でものごとを進めます。清掃活動のしかたや班の分けかたも十分話し合って共同して決めていくことになります。ただし、清掃活動自体の提案は大人側から出てきているので、この段階でも主導権は大人の側にあります。

通常の活動の中では、第4段の役割参加から始めて、次第に子どもたちから意見が出てくる意見参加に進み、さらに共に納得して決定していく共同決定参加へと進むことが当面の目標になることでしょう。

子ども主導の参加

参加のはしごの第7段と8段は「子ども主導の参加」です。第7段は「子どもがやりきる参加」です。この段階になると、活動の計画から実行そして評価まで、子どもたちが自主的にやります。先の事例で言えば、子どもクラブの活動が進展していった、「清掃活動ばかりではつまらないから、子どもフェスティバルをしよう」というような提案が子どもの間から出てきて、それを子どもたちだけで計画し実行するような場合です。大人に相談したり、援助も求めることがあるかもしれませんが、主導権はあくまで子どもの側にあるような場合です。

8段ははしごの最高段で「大人を巻き込む参加」です。例えば、子どもクラブで企画した子どもフェスティバルに地域の大人にも出番を与えて、歌や踊りを披露してもらうようなケースです。あくまで主導権は子どもの側にあり、地域の大人

6. 形だけの参加

人を活動に巻き込むようなケースです。

一方、はしごの1～3段は子どもが参加しているように見えても、実際には参加していない状態です。まずは「3段

形式的参加」です。子どもが形だけ参加させられている状態です。例えば、子どもクラブの運営委員会を子どもの代表3人と大人の指導者2人で作ったとします。運営委員会が開かれても、子どもは大人の提案をそのまま追認するだけの存在であるような場合が形式的参加です。大人は「子どもとともに決めています」と言うかもしれませんが、実際には子どもの声は活動に反映されていません。

「2段 お飾り参加」はさらに子どもの参加度が低い場合です。例えば、子どもクラブには運営委員会はあるものの、実際には一度も開催されたことがなく、いつも大人の企画に子どもがそのまま参加しているだけ、というような場合です。この場合、運営委員会自体が単なる「お飾り」です。

最低段の1段は「欺き参加」ないしは「操り参加」です。子どもたちは大人に利用されているだけで、時にはだまされています。

例えば、子ども参加のモデル・プロジェクトとして大人と子どもの参加による運営委員会による企画・運営を謳い文句にして、補助金をもらっているとします。にもかかわらず、その運営委員会が実

際には開かれずにいるような場合です。

2段めとの違いは、この場合明らかな「うそ」が含まれていて、結果的に子どもを欺いていることです。

1段めの欺き参加はかなり悪質ですが、3段めの形式的参加には気をつけねばなりません。子どもたちが参加しているという形だけを作る、というケースはかなり多く見られるからです。形式的参加と意見参加の区別も微妙です。

子どもたちが発言しているから意見参加というわけではありません。子どもたちの一部が大人の言いたいことを先取りして、大人の意見を代弁しているような場合は形式的な参加となります。

日本では中学や高校の生徒会にはそのようなケースがたくさんあります。あるいは地方自治体の「子ども議会」や「青年議会」にもよく見られます。子どもが市長に対して意見を言っても、それはあらかじめ(大人によって決められた)シナリオ通りの発言であったり、子どもの発言がその後市政に取り入れられたのかどうか報告がないような場合です。この場合、必ず大きな写真が地方紙に掲載され、「子どもの意見に耳を傾ける市長」のような見出しが踊ります。

7. NGO活動と子ども参加

最初から結果を求めない

NGOの実際の活動において、子ども参加を促すためにはどのようなこと気をつけていけばよいのでしょうか。現場で何より大切なことは「子どもたちの声に耳を傾ける」ということです。自分の意見をはっきり言える子どももいますが、多くの子どもたちは自分の考えや気持ちを大人に分かる形で表現することは難しいです。しかし、たどたどしい発言でもじっくり聞いてくれるような雰囲気があったり、手助けしてくれる人がいれば、事情は違ってくるでしょう。「子どもの小さな声を聞く」、これが第一歩です。

次に、結果をすぐに求めない、ということが大事です。参加のはしごで見たとように、子ども参加にはいくつもの段階があります。またグループワークで説明したように子どもたちが活発に参加するまでには一定のプロセスがあります。子ども参加という点では「7段 子どもがやりきる参加」が理想のように思われます。そのため、子どもたちが多く発言して、実行しているかのような「形」を求めがちです。しかし、これはへたをすると3段の形式的参加、すなわち参加していない状

態であるかもしれないのです。4段から上はすべて子どもが参加している状態です。たとえ役割参加でも、それは次へのステップなのです。子どもの参加は実は階段を登るようにはスムーズにはいきません。ときには紆余曲折があり、階段を上ったり降りたりしながら、ゆっくり進むものです。それでも子どもたちはそのプロセスで何かを学んでいるはずで、すぐに結果を求めずに、じっくり子どもたちの行動につきあうようにしましょう。

組織の方針として子ども参加を

子ども参加を促すためには、現場のワーカーがそれを行うだけでなく、現場を支える組織自体の支援が大切です。プロジェクトを行う場合、最初から子ども参加を目的のひとつに据えておき、それを組織がバックアップする体制が求められます。そのためには、子ども参加の必要性について組織の内部でも合意形成しておく必要があります。

子ども参加を促すのは大変気の長く根気がいることではあるのですが、これがうまくいった場合、当初の予想に反して予期せぬ結果をもたらすことが、これまでの子ども参加の実例から報告されています。子ども参加によって、子ども

たち自身が成長するばかりではなく、プロジェクト自体も大きく成長していきます。そしてそれを指導した大人をも成長させるのです。

また、子どもは大人の言うことよりも、子どもの言うことをよく聞きます。プラン・バングラデシュによる「子どもたちとともに進める地域開発」の事例では、子ども参加の結果、「早婚が減った」「女の子へのからかいが減った」「多くの女子が教育を受けられるようになった」「ドラッグを吸う男の子の数が減った」などの成果が実際に上がっています。これらは大人だけの働きかけでは達成されないか、あるいは効果が少なかったことでしょう。子ども自身が子どもたちに呼び掛けて働きかけたからこそ得られた成果なのです。

プロジェクトを行う際に、子ども参加を副次的な「おまけ」の目標ではなく、それを中心に据えてみてください。そのことによって、子どもにとっても主催組織にとってもより成果が望めるプロジェクトとなることでしょう。

Part2

事例編

子どもたちによる社会参加 バングラデシュ
プロセスのすべてに子どもが関わる

子どもたちによる社会参加 ネパール
だれもが教育を受けられるように

子ども参加を促す啓発プログラム フィリピン
自尊感情を育み、行動につなげる

子ども参加を促す啓発プログラム インド
社会を築く価値観を育む

子どもたちによる 社会参加

プロセスのすべてに子どもが関わる

「子どもクラブ」 / バングラデシュ
プラン・バングラデシュ

「子どもとともに進める地域開発」Child Centered Community Development (CCCD) - プランが進めているこのアプローチでは、地域が抱える問題の把握からプロジェクトの計画立案、実施、事後評価まで、すべてのプロセスに地域の住民、なかでも子どもたちが主体的に関わる仕組みづくりをしています。

コミュニティ開発委員会の一つに「子どもクラブ」を正式に設立すること、意思決定機関である各委員会に子どもが参加することを通して、子どもたちにコミュニティの問題に取り組む活動の場と意思決定への参加の機会が設けられています。

プラン・バングラデシュがダッカのスラム地域で実施しているプロジェクトを例に、子どもクラブを見てみましょう。



「大人との会議は、最初、形式的で居心地が悪かったです。何回も聞いて私たちが意見を言っていくと、だんだん大人は子どもを認めるようになりました」(前列手前の女の子)



踊りや音楽、劇は、子どもたちの楽しみであり、喜びであり、人々に思いを伝える大切なもの。

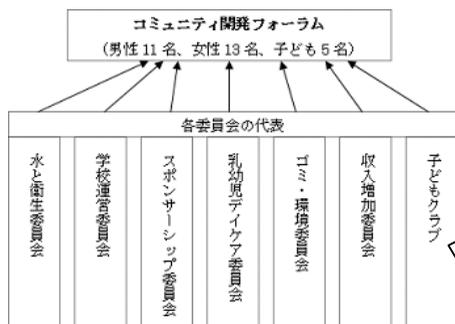
**地域の意思決定機関に
参加する「子どもクラブ」**

ダッカ市の北東に位置するバウニアバッド・スラムで、プランが活動を始めたのは1998年。10年経った

現在、バウニアバッドでは住民が主体的に進めるコミュニティ開発活動が根づいています。その開発活動の重要な担い手のひとつとなっているのが、子どもクラブです。

コミュニティ開発のための住民組織(図1)の正式な一機関である子どもクラブは、自分たちの立てる年間計画に基づき、地域住民への啓発活動やモニタリング活動など、さまざまな取り組みを行っています。

バウニアバッドの住民組織(図1)



**子どもたちの活動が
地域に変化をもたらす**

<子どもクラブ>

メンバー資格: 9歳 ~ 18歳 (1家族から1人)

活動: ・地域の調査

・調査と体験をもとに、大人への啓発の歌・踊り・寸劇を創作し、演じる。

・大人とのコミュニティ開発フォーラムで地域の問題の解決に加わり、取り組みの達成の評価も行う。

会合: 月に1回

役職: 代表、副代表、財務担当、コミュニケーション担当、書記、運営委員2人(毎年選出)

なかでも、コミュニティのお祭りなどの機会を利用しながら、

歌や踊り、寸劇を通して地位が抱える課題について、メッセージを投げかける啓発活動は、子どもクラブの活動の要といえます。娯楽性の高いこれらの伝達手段は、大人にも子どもにも受け入れられ、メッセージを

伝えるにも効果的です。繰り返すことにより、地域に変化が表れてきました。

プラン・スタッフは、このような子どもたちの主体的な取り組みを手助けするファシリテーター（進行役）を務めます。



寸劇で体罰教師の授業を演じる子どもたち。
学校での体験をもとにしている。

< 子どもたちの活動による成果の例 >

早婚が減った

多くの女子が教育を受けられるようになった

男の子による女の子へのからかいが減った

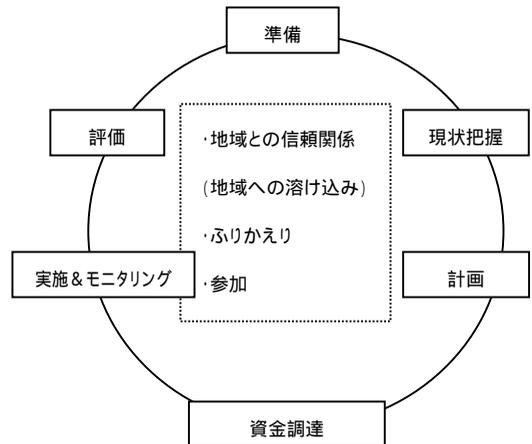
ドラッグを吸う男の子の数が減った など

子どもたちは、NGO の呼びかけで 地域の現状把握から始めた

プランは活動を開始するにあたって、コミュニティの状況を把握するとともに、住民からプラン・スタッフを認知してもらうため、「溶け込み」期間（2～3 か月）を設けます。

この下地づくりが大切で、それを経た後、子どもたちに組織化を呼びかけます。子どもたちは同じ地区に住んでいる、すでにお互いによく知った同士です。子どもたちが最初に行うのが、自分たちの暮らす地区の現状把握（アセスメント）です。どんな問題があるのか、その問題の原因は何か、コミュニティにはどのようなリソースがどのような場所にあるのかなどを、子どもたちで特定し、意見を出し合います。

「子どもとともに進める地域開発」 の基本的アプローチ



NGO が引っぱるのでなく「まかせる」
ことで、参加する力がついていく

現状把握作業の際、プラン・スタッフは、子どもたちの意見や考えを引き出し、参加型ツールなどを使って、出てきた問題の整理や分析を手助けします。

プランのファシリテーションの基本姿勢は、「まかせる」ことです。プラン・スタッフは必要なときに問いを発したり、別の視点を投げかけたりするので。

最初の数年はプラン・スタッフが常に子どもたちとともにいますが、子どもたちは活動と経験を積み重ねるなかで、ファシリテーションを担えるようになります。こうして、子どもクラブの活動を通して、子どもたちは、基本的な社会参加スキルを身につけていきます。

年間の活動と課題を振り返り、
その次の取り組みへと進めていく

プラン・バングラデシュ、パートナーNGO の三者で立てます。その際には、地元の行政官も招待し、住民による取り組みが把握できるようにします。

子どもクラブは、年間計画を立て、毎年、活動実績とともに地域の変化や残る課題を振り返り、その結果をもとに次の1年の活動計画を立てます。前出の啓発活動のほかに、子どもの権利の学習やスポンサーシップにおける通信物作成のサポートなどがあります。また、出生登録などのモニタリングも役割の一つです。



ファシリテーターを務めるボランティア(奥の女性)が発言を促す中で、子どもたちは意見を述べ、意思決定していくことを身につけていった。



子どもクラブの会合。母親が現れ、子どもを連れ戻そうとする。子どもクラブの歩みを寸劇で紹介

コミュニティは、3 か年計画を、コミュニティ開発フォーラム、プ



取り組みへの評価は、大人、子どもそれぞれが行う

大人が見落としていた問題に
子どもたちが気づき
地域全体で話し合っていく

パウニアバッドの
事例で特筆すべき
もう一つの点は、コ
ミュニティ開発活動

の意思決定プロセスに、子どもたちが参加しているということです。

最高意思決定機関であるコミュニティ開発フォーラムや各委員会に、子どもクラブから2~6人の子ども代表がそれぞれ参加しています。どの子どもがどの委員会に入るかは、子どもたちで決めました。委員会にただ参加している(存在している)だけでなく、話し合いのなかで子どもたちは大人と同様に、自分たちの視点からの意見やアイデアを出しながら、意思決定に参加しています。

例えば、子どもクラブで抽出した課題のなかで、親が働いていて、乳幼児の妹や弟を面倒見なければならない子どもの問題がありました。乳幼児を安心して世話を頼めるところはないが、そして妹や弟を世話している子どもが学校へ行けるようになるには...、そのような問題意識やアイデアがもととなり、コミュニティ開発フォーラムで話し合い、その結果、プランのパートナーNGO が実施するデイケアセンターが誕生したのです。

「今までは、声をあげても、誰も聴いてくれなかった。でも、フォーラムという場があると、子どもの声を正式に聴いてもらえる」

と、子どもクラブのメンバーは語っています。

地域の問題について、そこにいるべき人、届けられるべき声が、フォーラムに参加する機会が用意されたことによって、席につき、届いた、ということができるのではないで



CDF(コミュニティ開発フォーラム)の議事録。出席者、発言、議決内容が記録される



子どもたちが、自らの問題の解決を話し合うなかで、デイケアセンターが生まれた

しょうか。

大人が変わるのを
あせらずに待つ

いまでは子どもの意見を尊重し、子どもを活動の担い手として認識している各委員会の大人メンバーも、最初から

子どもを受け入れていたわけではありません。トレーニングや研修を通して子ども参加の意義や必要性を頭でわかったつもりでも、これまでの固定観念や慣習から、自分の考え方や価値観を変えることは大変難しいものでした。

それでも少しずつ子どもたちの発表や活動を見ていくうちに、「子どもでもできる」という実感が芽生えてきました。その実感が増えていき、時間をかけて大人メンバーの間で子どもを受け入れる態勢ができていったのです。

「大人と一緒に委員会に参加し、話し合う機会は、自分の学びになり、自分が大人になったとき、さらにコミュニティに貢献していくことができる。次の世代を育てていく機会でもある」

と、ある子どもメンバーが話してくれました。このような考え方が住民組織全体の風土になることで、持続的なコミュニティ主体の開発につながっていくのかもしれませんが、



レーダーチャートで報告する子どもクラブのメンバー。大人は子どもの力を認め、子どもは自信を持てるようになる。

子どもたちによる 社会参加

だれもが教育を受けられるように

「子どもエンパワーメント委員会」「子どもクラブ」/ネパール
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ)
アスマン・ネパール (Asaman)

「すべての子どもが質の高い基礎教育を受けられるようになる」- セーブザチルドレンジャパン(SCJ)がパートナーNGOのアスマン・ネパール(アスマン)とともに目指している目標です。JICAの資金援助を得て2008年から開始したプロジェクトでは、この目標を達成するために、公立学校の運営改善はもちろん、村の人々を組織化し、村の人々自身が行動を起こしていくことに焦点を当てています。その主要な担い手のひとつが、子どもたちが結成するグループです。

地域で、子どもによる子どものための 識字クラスを実施

村レベルで結成される「子どもエンパワーメント委員会」に参加する子どもたちは、村の子どもたちに関するさまざまな問題を話し合い、自分たちのできることから取り組みを始めています。

約2000世帯が住むダムラ村は、イスラム教徒が多く住む地区です。貧しさなどの理由から、10歳を越える子どもがインドにある縫製工場などへ出稼ぎに出されるケースが多く見られます。女子の教育に対しても積極的でない親が少なくありません。

そのようなダムラ村で、学校に行っていない女子15名に、2008年9月から識字クラスを開催しているのが、「子どもエンパワーメント

村レベルで結成される「子どもエンパワーメント委員会」に参加する子どもたちは、村



子どもエンパワーメント委員会のメンバー。ブリキのケースに識字クラスで使う文具や出席簿が入っている。

委員会」の子どもたちです。

子どもエンパワーメント委員会メンバーは交代で、1日に3時間、週5日、簡単な読み書きを、不就学の女子たちに無料で教えています。識字クラスを行う場所は、委員会メンバーの父親が委員会の部屋として貸してくれた小屋を使っています。

文房具は、アスマンのミーティングで配られたものを委員会メンバーが彼女たちに譲っています。

識字クラスを始めて5か月。これまでに読み書きを学んだ女子3名が、公立学校に編入しました。

女の子たちは、識字クラスから公立学校に編入した

地域の教育を見つめ
「何とかしたい」と行動を開始

なぜ委員会メンバーは識字クラスを実施するようになったのでしょうか。それは、ダムラ村の子ども

エンパワーメント委員会の設立経緯に関係します。

アスマンはまず、学校レベルで子どもの組織化を働きかけ、学校に通う子どもたちに、子どもの権利や教育へのアクセス、自分たちの周りにある教育に関する問題を考える機会を設けました。その後、学校に子どもクラブが結成され、活動へと発展します。そして、村レベルでも子どもの組織化が始まるのです。

ダムラ村の子どもたちは、村には不就学児童(特に女子)、早期結婚、児童労働などの問題があり、これらの問題に対応するために、アスマンの支援を得て委員会設立を提案。親たちには教育の重要性を訴え、委員会設立の同意を得ました。村の人から貸してもらった小屋を委員会の部屋にして、正式に活動を開始しました。

ダムラ村子どもエンパワーメント委員会の活動は、とくに不就学の子どもたちが学校に通うための「カウンセリング」を行うことを役割としています。

ダムラ村では、伝統・慣習などから女子の教育に対する親の理解が

NGO は子どもたちが教育を考える機会をつくることから始めた

十分でなく、家事に従事しているなどの理由から学校へ通わない女子が多くなります。13歳を超えると、小学1年生の教室で年下の子どもたちと一緒に学ぶのが恥ずかしく、躊躇してしまうケースも目立ちます。

このような状況を何とかしたい、と話し合いを重ねた委員会メンバーは、識字クラス開設を決めたのです。

学校に行っていない子どもの親を
子どもたちが説得して回る

しかし、すぐにクラスを開始できたわけではありません。まず、学校へ通わない女子の親を説得し

て回らなければなりません。アスマン・スタッフも同行しましたが、交渉したのは子どもエンパワーメント委員会のメンバーです。教育を受けることのメリットや将来のことに触れながら、根気強く親たちを説得し、その結果 15名の女子が識字クラスに参加するようになったのです。ほかにも、学校に通っていない女子の家庭、35世帯をこれまでに訪問しています。

児童労働をやめて
学校に通い始めた
子どもの例もある

親だけでなく、村の女性フォーラムにも教育の重要性を訴えてきました。また、自分の子どもをインドのホテルに働きに行かせた親の元にも同様に何回も通い説得を続けた結果、その子どもが村に戻ることができ、学校へ通うようになったという成功例もあります。

自分たちの活動に確かな手応えを感じている委員会メンバーは、子どもを学校へ行かせるためには、親との連携が大切だと強調します。周りの子どもの状況に少しずつでも良い変化が起きていることを励みとし、ダムラ村子どもエンパワーメント委員会の子どもたちは、現在も積極的に活動をしています。

子どもたちは、教員・保護者とともに
学校改善計画に参加する

学校内においても子どもたちによる取り組みが活発に行われています。

ネパールでは、各学校

に子どもクラブを設けることが教育政策として定められています。2007年に公布された暫定憲法にも「子ども参加」について記されています。子ども参加の解釈については、ネパール国内でも議論されているところですが、アスマンが促進しているのは、ダムラ村子どもエンパワーメント委員会のような子どもたち自身による問題解決への取り組みのほか、学校改善計画プロセスへの子ども参加です。

めざすは、学校改善の意思決定の場に子どもの参加を促すこと

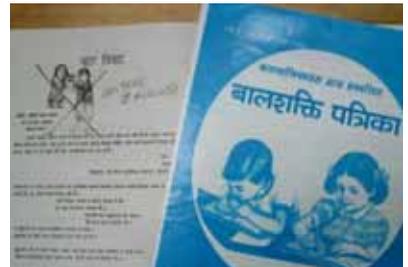
公立学校では、校長や教員、保護者、地域メンバーで構成される学校運営委員会が設置され、学校改善計画が策定されることになっています。

子どもたちは、できる活動から積み上げ、大人との議論に参加していく

子どもクラブメンバーは、この学校改善計画の計画策定プロセスに参加することが推奨されています。

しかし、子どもたちは、学校改善計画のプロセスに最初から参加するわけではありません。

まずは子どもクラブが就学キャンペーンやラリーなど、自分たちができる活動から少しずつ始めていきます。このほか、学校施設環境美化活動(花壇づくりなど)、不就学児童に対して学校へ通うようにとの働きかけ、教員の出欠確認、教室内での教員による体罰モニタリングと、その子ども権利プロテクターへの報告、毎月の定例ミーティングなど、さまざまな活動がこれまで実施されています。



子どもたちの文章をまとめた冊子。笑い話もあれば、早婚問題を絵とともに訴えている。アスマンが発行。誌面作りは大人に手によるが、その技術を子どもに伝え、定期刊行していく計画。

子どもたちがこのような活動を行っていく中で、「自分たちは、さまざまな活動を行ったり、議論に参加したりする準備ができています」ことを、周りの大人たちに示していきます。時間をかけて、大人の意識の変化や子ども参加に関する理解を促していくことが重要なのです。

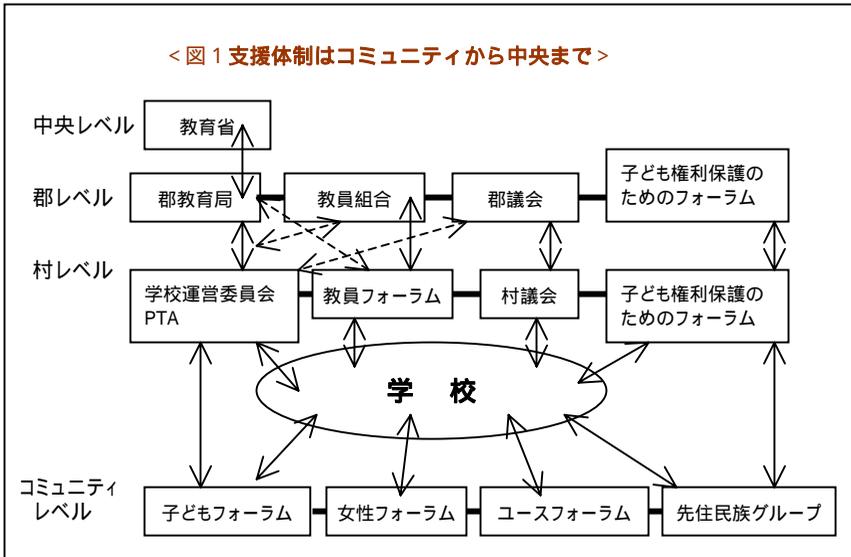
現在の活動地、5 村で、このような意思決定参加プロセスへの子ども参加は始まったばかりです。

村ごとに、教育を支援する仕組み

このように、子どもたちはもちろん、地域住民が、「すべての子どもが包摂

的で質の高い初等義務教育を受けられるようになる」ことを目指して連携し、主体的に行動を起こしていけるように、アスマンは村ごとに働きかけをしています。

< 図 1 支援体制はコミュニティから中央まで >



SCJ とアスマンが目標達成のための方法として第一に挙げている、この地域住民の主体的な行動と取り組みを成功させるためには、村レベルでの子どもの教育を支援する仕組みづくりが鍵となります。前出のダムラ村の子どもエンパワーメント委員会もこの支援組織のひとつです。プロジェクトの初期段階で、アスマンは図1のように、中央・地方行政とも連携し、村レベルでの支援体制づくりに取り組みます。具体的には、コミュニティレベルで子どもや女性、青年層でそれぞれフォーラムと呼ばれるグループの組織化、そしてこれら地域レベルの組織と学校運営委

プロジェクトの初期段階に行政との連携を図るのが重要

員会、PTA、教員フォーラム、村議会、子どもの権利保護のためのフォーラムが互いに連携し合えるような、子どもの教育を支援するための体制をつくります。

子どもの参加を阻む大人の意識

地域の子どもや大人が協働して、より良い変化のために行動を起こしてい

く そんな取り組みを進める上で課題も多くあります。なかでも、いまだ子どもに対する否定的な固定観念や考え方・態度を持つ大人が多いことが、子ども参加の環境づくりに大きな阻害要因となっています。

とくに、学校内では子ども参加の価値が認められていても、地域レベルでは難しいのが現状です。過去のアスマン活動地においても、子どもの声が地域の大人に無視されたり、組織のリーダー層が子どもミーティングに参加しながらない、子どもとの交流も持とうとしないケースがありました。

大人の子どもに対する意識や考え方の変化には、相当な時間と根気が必要になりますが、先述したように、子どもたちの取り組み実績を少しずつ大人に認めてもらうことが大切だと、アスマン・スタッフは言います。地域レベルなどの支援体制をはじめとした、子どもが活動しやすい、子どもにとって好ましい環境を整えていくことが、アスマンの役割として求められています。

フィールド・スタッフの底力

村の中で、子どもクラブ、子どもエンパワーメント委員会の活動や支援組織間の連携を促進しているのが、ソーシャル・ムーブライザーと呼ばれるフィールド・スタッフです。また、村内での子どもの就学状況を家庭と学校において定期的に確認している子どもの権利プロテクタ

子どもの取り組み実績を大人に認めさせることは、NGOの大切な仕事



ソーシャル・ムーブライザーと子どもたちの就学状況を全戸、毎日調べ、記録する子どもの権利プロテクター

ー (CRP: Child Rights Protector) も重要な役割を担っています。

アスマンは、このソーシャル・ムーブライザーと CRP を支援対象地域から雇用します。その地域の出身で、10～12 学年の教育を修了しているという条件の他、貧しい家庭出身や不可触カースト(ダリット)であることなどの条件をつけています。これは、地域住民と同じ目線で物事を見ることができ、貧困に起因する多くの課題を理解できることなどの理由があります。

子どもたちの取り組みをさまざまな面で支援する役割を持つこれらのスタッフには、種々の集中トレーニングだけではなく、日常業務を通しての訓練(OJT)や定期的なミーティングでの話し合いを通じて、実践的知識とスキル向上を目指します。

現在 SCJ とアスマンが実施しているプロジェクトでは、就学率向上とともに教育の質向上へのアプローチが求められています。これは、SCJ やアスマンにとっても初めてであり、チャレンジングな試みでもあります。

「子どもの参加」とは何か、「教育の質」とは何か、というプロジェクトの根幹に関する問いを、SCJ とアスマンの間だけでなく、地域の子どもや住民に投げかけ、プロジェクト計画時から継続して話し合いを重ねていくことが必要だ、と SCJ ネパール事務所代表は強調します。子どもや地域住民が考える(定義する)「教育の質」を促進する。そう語った代表は、定期モニタリングの際に、活動地の一村の子どもエンパワーメント委員会の発言にその手がかりを見つけたといいます。地域の子どもや住民の声に基づいた取り組みだからこそ、支援する NGO も自信を持って推進することができ、そして地域での成果が期待できるのです。子どもを含めた関係者が、教育に対するそれぞれの責任を果たしていけるよう、SCJ とアスマンの地域との協働は続いています。



ある CRP の担当区域の地図と調査記録。フィールド・スタッフの日々の活動が、子どもたちの取り組みを支える

子どもと大人に問いかけ、声を待ち、その声から取り組みの手がかりを見つけたとき、NGO は大きな勇気を得る

子ども参加を促す
啓発プログラム

自尊感情を育み、行動につなげる

自己啓発プログラム／フィリピン
チャイルド・ファンド・ジャパン

チャイルド・ファンド・ジャパンはフィリピンで包括的なコミュニティ向上プロジェクトであるスポンサーシップ・プログラムを実施し、「教育」「保健栄養」「所得の向上」を中心に地域住民の生活の質改善を目指しています。

初期の活動

「NGO がニーズに応える」から
「人びとが自ら解決に取り組む」へ

はベーシック・
ニーズを提供
するものが中

心でしたが、住民が主体的に自分たちの問題に取り組むことがより効果的な問題解決につながると考えたチャイルド・ファンド・ジャパンは、スポンサーシップ・プログラムの柱のひとつに自己啓発(Value Formation)プログラムを据えました。



ワークショップ

自己啓発プログラムは、地域の人々、とくに子どもを対象に行われる一連のワークショップです。このプログラムの根底には、“人はセルフ・エスティーム(自尊感情)を高め、肯定的な価値観を持つことにより、その価値観が原動力となり、より良い変化のための行動につなげていくことができる”、というチャイルド・ファンド・ジャパンの持つ中心的価値観があります。自己啓発プログラムに参加する子どもたちは、ワークショップを通して、自分にはそのような力があると思える、ものの見方・考え方、価値観を育み、主体的に取り組む態度を身につけていきます。

フィリピン国内 23 のチャイルド・ファンド・センターそれぞれが地域の課題や状況に応じた内容やアプローチの自己啓発プログラムを実施し、1センターで延べ 150～400 人の子どもが参加しています。ピサヤ地方ギマラス島のチャイルド・ファンド・センターの例を見てください。

「私たちのコミュニティ」[6 - 9 歳] (2 時間)

目的: 地域で協力し合うことの良さを知る

準備するもの: 対照的な地域の様子を描いた2枚の絵 (1枚は清掃が行き届いた地域で、人々が互いに助け合っている。もう1枚はごみや動物の糞尿で汚れ、具合の悪い子どもたちが描かれている)

進め方: 子どもが全員集まるまでの間、「It's I Building Community」の歌をかける。

集まったら、子どものなかからお祈りのリード役を
お願ひ、お祈りする。

半円をつくりながら、子どもたちに座ってもらう

ワークショップの目的を伝える

子どもたちを3つのグループに分ける

子どもたちにコミュニティの2つの異なる写真を見せる

「写真をよく見てください。人びとは何をしていますか？

どんな表情をしていますか。

どんな気持ちでしょう？なぜ彼らは幸せなのですか？

質問をする「自分のコミュニティのどんなところが好き

ですか？人々はお互いに何を共有しているのですか？

あなたはそれが好きですか、嫌いですか？

将来どんなコミュニティに住んでみたいですか？

協力し合うために、あなたや友達はどうなことをしますか？」

グループごとに、質問に答えるためのコラージュを作り、発表する

ファシリテーターがまとめる。「コミュニティの一員ということは、私たちはコミュニティに愛着を持ち、協力・共有し、そして貢献することが大切なのです」

最後に子どもたちに「It's I Building Community」を歌ってもらい、お祈りをして終わる

*このワークショップの前に、「きれいなコミュニティのイメージを持つ」「きれいなコミュニティづくりの大切さに気づく」を目的としたワークショップを行う。



「悪い」「よい」を左右で書き分けた絵



子どもたちが作ったコラージュ

ファシリテーターの問いに
意見、アイデアが出されていく

「私たちのコミュニティ」を含む、
コミュニティ環境をテーマとした
ワークショップは、子どもたちが、

自分たちのコミュニティの環境をより良くすることを段階的に考えていけるよ
うな内容の順で、ワークショップスケジュールを組み立てています。

ワークショップのなかでファシリテーター
が主に行っているのは、子どもたちに問い
を発することです。子どもたちは、それぞれ
が感じたことや思ったことをグループ内で
共有し、ファシリテーターの問いに意見や
アイデアを出し合いながら話し合います。
ワークショップの主役は、参加する子どもた
ちなのです。子どもたちがテーマについてさまざまな角度から考え、話し合
えるようにするのがファシリテーターの重要な役割のひとつです。



意見を言おうと
手を上げる

自己啓発プログラムは、子どもと大人と一緒に参加するワークショップも
実施しています。例えば、学校が始まる前や夏休みなどに、子どもの教育
に関して子どもと親、学校などの責任や期待することについて話し合う機会
をもちます。

また、子ども対象に行ったプログラムの内容は、地域のおとなにも紹介し、
プログラムを通じて生じる子どもの内面的変化・成長を地域の大人も理解
し、支えるような姿勢を育みます。

自信をつける、
コミュニケーション能力を培う

「自己啓発プログラムの活
動は、最初は緊張して、どち
らかというと憂鬱でした。でも
参加するうちにどんな意見を

言っても“間違っている”と否定をされないし、ばかにされないから、自分の
考えが人と違っていてもいいのだとわかって、楽になりました」と、参加して
いる女の子は語ります。そして、自己啓発プログラムに参加していちばん変

わった点として、「自信がついた」と答えています。

ワークショップでの体験を通して、子どもたちは、自分を高め、自信をつけ、集団のなかでのコミュニケーション能力、協調性を培っていきます。

学んで、新たな活動が始まる

自己啓発プログラムに参加している子どものなかに、学校の課外活動として手作りの

ビーズ細工プレスレットやネックレスを学校で販売している子どもたちがいます(男女希望者が参加)。

これは、「あふれる才能」「創造性」「儉約」という価値観を学んだワークショップのなかで、活動計画を考えた際に出てきたアイデアなのです。自分たちで、何を作り、どのように販売するのか、話し合って決めました。自分たちの手作りしたビーズ細工アクセサリーが売れると、



子どもたちは報告し合い、公正に売り上げを記録します。それぞれの報酬を受け取ると、子どもたちは、そのわずかだけれど貴重なお金を、学校や家族のために役立てるといいます。

プレスレットを作る

ファシリテーターのトレーニング

ワークショップのファシリテーターは、訓練を積んだチャイルド・ファンド・センターのスタッフ

です。ファシリテーターは、子どもたちがお互いの意見を聴き合い、話し合う場を通して、問題に対する気づきが促され、その気づきを一般化し、行動のための計画を立てられるように支援します。

そのためには、従来の学校で行われている教え方ではなく、楽しく、参加型で分析的に考えられる方法が求められます。

ギマラス島のセンターでは、スタッフ間でファシリテーションを模擬的に行ったり、実際のファシリテーションを通して批評しあい、フィードバックしながら、効果的なファシリテーションの仕方を学んでいます。

また、ワークショップやミーティングで起こりうる問題(例えば、一人で長く話してしまう人、時間を守らない人、人の意見を頭から否定する人など参加者に関する問題)に対して、具体的な事例を挙げながら、それぞれの問題に対してどのように対処するかも細かくトレーニングします。

ワークショップやミーティングでは、話し合いに視覚的表現を加えることも有効な手立てです。例えば、地元で調達できるもの(石や砂、花、小枝、葉っぱなど)を使って、参加者で協力し合っているテーマのもとに何かを作り上げるといったファシリテーションのスキルを学び、アイデアを持ち寄りながらモジュールを作成していきます。

**大切なのは
子どもが変わるのを確信すること**

このようなファシリテーション・スキルの学びも大切ですが、ギマラス島のセンター長がもう一つ強調していたのが、実施するスタッフが強いコミットメントを持ち、自己啓発プログラムの意義を信じていることです。プログラムを通して、子どもたちが肯定的な価値観を育み、変わっていくことをスタッフ全員が確信しています。

子どもが自分の可能性を信じられるようになるには時間がかかります。繰り返しワークショップに参加することで自分や他者を尊重し、自分の人生や地域社会を良いものに変えていこうとする価値観や意欲を育む - 自己啓発プログラムは、子どもたちの社会参加の基盤づくりを行っています。

このようなファシリテーション・スキルの学びも大切ですが、ギマラス島のセンター長がもう一つ強調していたのが、実施



自分に自信をつけ、手に職をつけて、レストランで活躍。引込み思案だった面影もなく

子どもの声が形になった ジャンクフード販売禁止条例成立

フィリピンの西部ビサヤ地方にあるギマラス州は、人口 15 万人弱、世帯数 3 万弱という風光明媚な島である。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1996 年よりこのギマラス島でスポンサーシップ・プログラムを開始。開始当時、就学支援対象の子どもの68%が栄養不良であった。



子ども会議

これに対し、子どもや保護者に対する補食サービスや保健教育を提供することを通じて栄養状態を改善したが、その状態をいかに持続するかという課題に直面。事業スタッフの発案により、地域の支援対象の高校生が中心となって、地域の3つの小学校を対象に就学児童の食生活に関する参加型の調査が実施された(調査の実施を事業スタッフがサポート)。この調査のデータから、子どもの多くが「ジャンクフード」を日常的に食べていることが明らかになった。

この調査結果は地域の大人の間でも注目され、校長・教師、親の代表、事業スタッフ、そして子どもの代表間で、対応について話し合いの場が持たれるようになった。また、町役場からの代表も話し合いに加わるよう働きかけがなされた。そして、サマーキャンプで行われた自己啓発プログラムでの子どもたちの話し合いを通じ、子どもたちが地域の各村役場に対し、ジャンクフードを禁止する決議を求める提案を提出する動きにつながる。村役場でこの提案が取り上げられ、町役場に提出され、禁止条例が成立した。

子ども参加を促す
啓発プログラム

社会を築く価値観を育む

ライフ・スクール(LSTD) / インド
ワールドビジョン・インディア(WVI)

「子どもにやさしいコミュニティづくりによって、全ての子どもたちに豊かな命を」というビジョンのもと、ワールドビジョン・インディア(WVI)では、各地で長期総合地域開発プログラム(ADP: Area Development Program)を展開しています。

その一環で、大勢の子どもを対象に行われるプログラムが、ライフ・スクール(LSTD: Life School for Transformational Development) です。この活動を、WVI は「運動」として位置づけ、子どもたちが主体的に行動を起こし、コミュニティを変革する開発を促すことを目的としています。

子どもも、地域の大人も気軽に
参加できる 5 日間集中プログラム

1997 年ケララ州で始まった LSTD は、いまやインド各地で行われ、参加する子どもの数は各コミュニティで 100 ~ 500 人、全インドで 7000 人にのぼります。

LSTD は、あらゆる子どもたちが参加しやすいように、学校の夏休み期間に行われます。5 日間集中プログラムですが、泊りがけとせず、自宅から通えるので、子どもたちは気軽に参加できます。

また、村のなかのオープンな場所で行い、大人も好きなきときに参加できるように工夫されています。

楽しく創造的に学べる工夫をする

子どもたち自身が、平和を築き、社会的な変革を起こす役割を担えるような価値観を育むことを目指す LSTD は、子どもたちが様々な課題を重層的に考えることができる内容になっています。

各年のテーマを設けます。ある年は「自分たちで新しい世界を築こう」のもと、次のプログラムが組まれました。

「自分たちで新しい世界を築こう」

- 1 日目: リーダーの資質を考える
- 2 日目: 家族のこと
- 3 日目: コミュニティのこと
- 4 日目: 保健のこと(HIV/AIDS を含む)
- 5 日目: 信仰と価値観について

LSTD は、5-15 歳の子どもを対象とし、年齢で 3 つに分け、それぞれ 10 人前後の活動グループをつくります。

個々の活動に使われる手法も、年齢や学習スタイルに応じて、グループ・ゲーム、工作、描画、絵画、料理、読み聞かせ、歌、音楽など参加型で創造的な手法を活用しながら、子どもたちが、ものごとを考えたり、話し合ったりできるようにしています。

プログラムの最後には、先生や大人たちへの発表会を行います。



社会への提言を発表する子どもたち

子どもたちの声

「4年間 LSTD に参加しています。LSTD はまるで村のお祭りです。LSTD を通して、私は自然の大切さ、環境保護の視点、目上の人々を敬うこと、分かち合いの精神、学校の大切さを学びました」

「楽しく学べて、自分に自信が持てるようになった」

「家族以外の年上の人や大人と知り合うようになった。子どもたちが社会に接する機会が増えた」

(ケララ州の子どもたち)

子どもたちが、教育の必要性を
社会に訴え、保護者に働きかける

毎年継続して参加する子どもも多くいます。ある地域では、LSTD 参加後、子ども

クラブに参加する子どもたちは、教育の必要性のアドボカシー活動や保護者に対しての働きかけを始めたとの報告もあります。LSTD は子どもたちの価値基盤形成と同時に、行動のための主体性を育むのに重要な役割を果たしています。

高校生や青年が
子どもたちの先生役をつとめる

子どもの活動グループを指導するのは、コミュニティから選ばれた先生です。高校生、

教員志望の青年など、選抜された先生は、事前に1週間トレーニングを受け、LSTD で使用される教科書の内容のほかに、子どもたちの保護や接し方、ファシリテーションスキルも学びます。

LSTD では、先生の質は重要であり、次のような教員の資質を掲げています。

先生の役割を担う高校生や青年たちにとっても、準備から5日間のプログラム実施までのプロセスに関わることで、さまざまな学びを得られます。ケララ州アラットゥプーザでLSTDの先生を経験した一人は、

「LSTD を通して自分が社会的、知的、道徳的、精神的に大変刺激された。子どもたちやコミュニティの人々と協働できた貴重な機会だった」

と語っています。



ライフ・スクール・スタッフと
参加した子ども

< 先生の資質 >

先生自身が最適な手段である
子どもを活気づける
個々の子どもを知る
子どもの気持ちで
レッスン(授業)のメッセージを信じる
子どもが考え、感じ、共有し、体験することを促す
子どものレベルを認識し、レベルに合った適切な言葉を使う
参加型の学びを可能にする雰囲気/環境を作り出す
子どもに長続きする効果をもたらす
問題を可能性に変えられるよう子どもに働きかける
子どもに理想やヴィジョンを持つことを教える
隣人愛などの宗教的価値感を促す
個の発達、リーダーシップ育成を助長する
子どもたちが意思決定しながら生きていくことを支援する
先生の本質を大事にする
子どもがものごとに対して問いを発することを促す
子どもたちの未来に関心を持つ
丹念に授業の準備をする
多種多様な創造性に富む手法を使う
見本・原型を提示する たとえ生き物でも

地域の人々の信頼を得、巻き込み
プログラムを継続していく

LSTD を実施する上で
何よりも大切なことは、地
域の人々と信頼関係を構
築することです。LSTD の

実行委員会は、地域のリーダーをはじめ、学校
教員、NGO、ユースクラブ、自助グループ
(SHG Self-help group) に委ねられています。

コミュニティが主体的に LSTD 実施プロセス
に関わることで、地域での継続的な LSTD が期
待できます。

また、教育局などの行政機関との連携も不
可欠で、可能な場合は実行委員として
LSTD に関わってもらいます。



みんなで地元料理を作り、親や地域の人たちに振舞う

< LSTD 実施の流れ >

各種委員会の立ち上げ(全般、会計、広報、エンターテイメント、食事、
プログラム、受付・登録、テーマ)、
子どもの参加人数や先生の数、会場、リーダーの選考、予算などの計画
各種委員会のミーティング実施、参加する子どもの登録、先生の選考、
財源の確保など
各種委員会のミーティング実施、リーダーのトレーニング実施、
教材・準備物の手配
先生のトレーニング実施
広報活動；案内リーフレットの配布、個別家庭訪問、寸劇発表での
案内などで呼びかけ
各種委員会のミーティング実施
ライフ・スクールのプログラム実施
評価

Part3

実践ガイド編

- 1.組織と人を意識づける
- 2.事業を進める
- 3.子どもに働きかける

練習問題

1.組織と人を意識づける

子ども参加を促すポイント			
組織	ビジョンと活動方針	リーダー層、マネジメント層	「子どもは変革の担い手」とする明確なビジョンと目的を持ち、組織をリードする
	意識・姿勢	スタッフ	子ども参加について、協働パートナーNGOと同じ意識、姿勢を持つ
		ファシリテーターとしての心構え	進行の主役は成果を生み出す主体、受益者自身であると、胸に刻む
	トレーニング	スキル向上への姿勢	日々の実践から、フィールド・スタッフの姿勢やスキルを高めていく * 継続したOJT * モニタリング * 自身の振り返り
地域	大人の意識	子ども参加の具体的な活動を見せる	“子どもたちは準備ができています”ということを通して大人に見せていく

[組織] 何から始める？

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(以下 SCJ)やプラン・バングラデシュ(以下プラン)の事例について、「もともと子ども参加やエンパワーメントを軸にした団体だからできるのでは？」と思った方もいるかもしれません。しかし、少しずつでもできることはたくさんあり、そのポイントを紹介していきます。

そもそも、なぜ子どもの参加が大切なのでしょう。それは、コミュニティ自身が良い変化を起こし、それを持続させていくには、子どもが、その意思決定プロセスに参加していくことがとても重要だからです。これらの事例は、子どもがその力を持っていること、そして NGO の役割とは子どもが参加する機会をつくることだと教えてくれているのではないのでしょうか。

取り組む前の注意

まず、その前に、子ども参加を実践するにあたり、複数の NGO がまとめた「子ども参加実践ガイドライン」(参考文献)は、注意すべき点として次の2つを挙げています。

子どもの参加しない権利も保障し、強制的な参加にならないようにする。

準備不足のまま始めて、子どもを傷つけないようにする。

では、どのようなことから始められるのでしょうか。自分たちの組織は、子ども参加をどう認識しているのか--組織のふりかえりから準備を進めていきましょう。

1-1. リーダー層、マネジメント層

**「子どもは変革の担い手」とする明確なビジョンと目的を持ち、
組織をリードする**

プランが「子どもとともに進める地域開発(CCCD)」の基本となるアプローチを導入したのは 1998 年。それまでのニーズ・ベースの支援から子どもや住民が開発プロセスの主体となるアプローチへの転換は、組織自体やスタッフにとって考え方や意識の大きな変革が求められるものでした。

CCCD 能力強化・人材育成専門家が強調したことは、「組織のリーダー層、マネジメント層が明確なビジョンと目的を持ち、組織を統率していけること」です。組織の基軸として、子どもも地域・社会変革に主体的に関わることができる活動方針を明確にし、組織内で徹底させるリーダーシップが必要です。

CCCD アプローチを採用した当初、地域に溶け込んで活動するために必要とされた 1-2 泊のホームステイに拒否反応を示したスタッフもいて、まずはスタッフの意識改革が必要でした。プランでは、「人が持つ能力と権利を信じる」「子どもや若者のポテンシャルを信じ、彼らが主体的に関われるような機会をつくる」「人々は知識が無いのではなく、機会が無いだけなので、そのための適切なファシリテーションを行う」、という CCCD の原則を徹底させています。

原則徹底の鍵は、日々の実践の客観的なふりかえりと、そこからの学び（詳細は「スタッフの研修」）。リーダー層の役割が要です。

1-2. スタッフ

子ども参加について、協働パートナーNGOと同じ意識と姿勢を持つ

プランのダッカ北部プログラムでは、分野別に 8 つのパートナーNGO と

提携しています。これまで、サービス提供を自らの仕事としてきた各NGOスタッフは、子ども参加を促す態度、技術を持ち合わせていませんでした。そうしたNGOにもプランスタッフと同じ意識や姿勢を持って活動してもらわなくてはなりません。

最前線のスタッフ対象のトレーニングは2週間かけて行われ、スタッフ交代などニーズがある度に行われます。各パートナーNGOに3、4人のリソースパーソンをつくり(リソースプールと呼ばれる)、彼らが自分の組織の能力強化を促進する役割を果たします。

また、プランは、パートナーNGOやコミュニティ住民対象に、年1回CCCDワークショップを実施し、子どもとともに進める地域開発を推進するための情報や経験を共有し合う機会を設けています。

ファシリテーターとしての心構え

進行の主役は成果を生み出す主体、受益者自身である、と胸に刻む

援助機関やNGOなどが開発途上で実施する社会開発プロジェクトにおいて、いまや多くのプロジェクトが「住民主体」「女性主体」など受益者が担い手となるアプローチを謳っています。住民主体のアプローチ、言葉は同じでも、NGOの関わり方は千差万別でしょう。NGOは全体のプロセスや話し合いを促す役割を担いますが、主役はあくまでも成果を生み出す主体、受益者自身であることを忘れるわけにはいきません。

子どもや地域住民が主体的に行動を起こしていく機会づくりのためのファシリテーションをNGOの役割のひとつとして、プランは挙げています。

ファシリテーションの鍵は、「まかせる」こと。子どもや地域住民のレベルによって度合いも違いますが、基本的には子どもや住民が自分たちでやってみる、そしてやったことをふりかえり、次へつなげていくというサイクルをサポートします。子どもや住民が自分たちのアイデアを形にできるように、人や組織・資金・情報などの面で、地域と行政・NGOを「つなぐ」のも重要な役割です。

1-3. スキル向上への姿勢

日々の実践から、フィールド・スタッフの姿勢やスキルを高めていく

取り組みの成否は、フィールド・スタッフの資質に大きく依存します。日々の実践のふりかえりやそこからの学びは、研修以上に大切だと、プランのスタッフもアスマンのスタッフも強調しています。

「学びの連続。完成はない」(プラン)

プランは、3日間のCCCDオリエンテーションワークショップ、12日間の集中トレーニング、6日間のトレーナー育成トレーニング、3日間のCCCDリフレクショントレーニングなどを実施しています。

しかし、これら以上に大切なのが、毎日の実践をふりかえり、そこから学び、プロセスファシリテーターとしての姿勢やスキルを向上していくことだといえます。

CCCDの能力強化・人材育成専門家は、「信じること、実践、自己のふりかえり」という3つのキーワードを挙げてくれました。人は変わることができる、人々は自分の力で行動を起こしていくことができるということを信じること、日々の実践を積み重ねていく、そして自分自身、自分たちの組織の実践をふりかえり、向上につなげていくこと。10年実践してきたCCCDアプローチですが、完成形はないといえます。

常に学びの連続で、それをアプローチ改善に反映させていくという組織文化を持つことは、強みといえるでしょう。

調査を通じて地域住民から人材発掘(アスマン)

アスマンの場合、コミュニティ住民への働きかけをする最前線のスタッフは、支援地域から採用します。

支援対象とする村で、まずアスマンが行うことは、村の住民との信頼関



子どもたちからの信頼が厚いファシリテーター(左から2人目)

係を構築しながら、子どもの就学状況など子どもや村の状況を把握するためのベースライン調査を実施することです。この調査の際にボランティアとして村の若者10人程度を選び、調査に協力してもらいます。この調査が、コミュニティの状況把握だけでなく、フィールド・スタッフ候補となる良い人材を探す手段でもあるのです。調査者は、貧しい家庭出身であることなど一定の要件のもと、コミュニティ関係者の推薦も考慮しつつ、フィールド・スタッフが選定します。

当初3か月は試用期間で、ボランティアとして働きます。トレーニングだけでなく、徹底した実施訓練(OJT)や定期的なミーティングでの話し合いを通して、フィールド・スタッフの実践的知識とスキルの向上を図り、フィールド・スタッフ同士での学び合いも奨励しています。

<フィールドスタッフ トレーニング (アスマン)>

子どもの権利について(3日間)

アスマンの5つの原則、子どもの定義、子どもの発達・態度、権利とニーズ、子どもの権利、アクションプラン

ソーシャル・ムービライゼーション(3日間)

アスマンの5つの原則、村での子どもの教育支援仕組みづくり、地域の状況分析方法、問題の把握の仕方、村の各ステークホルダーの役割と責任

ソーシャル・ムービライザーという役割と責任について(3日間)

子どもにとってわかりやすい教え方(学校教員と共同で、5日間)

子どもの定義、子どもにとってわかりやすいとはどういうことか、わかりやすい教え方チェックリスト、小学1・2年生(児童数が非常に多い)の事例分析、各ステークホルダーの役割と責任、体罰についての話し合い

質の高い教育について(学校教員との共同トレーニング、2日間)

質の高い教育とは、質の高い教育の要素、質の高い教育が提供できない原因分析、どのように質の高い教育を提供できるのか

[地域] 大人の意識を変えるには？

1-4.子どもの力を認め、受け入れる

○ 「大人が子どもの力を認め、受け入れた。 その変化のきっかけ、突破口は何だった？」

大人たちの子どもに対する否定的な固定観念や厳しくしつけるような態度を変えるのは、相当な時間と忍耐を伴う仕事です。

大人の意識・態度・行動を変えるには、どのような取り組みをすればよいのでしょうか。その手掛かりがプランとSCJ&アスマンの事例にありました。大人が、子どもたちの意見やアイデア、活動実績を知る機会を重ねていくことです。鍵となるのは、大人が実感を伴いながら、子どもの能力を認めていくこと。初期段階にこのような機会を適宜設けていくことが、プロセスファシリテーターとしてのNGOの重要な役割のひとつといえます。

子ども参加の具体的な活動を見せる

A 「“子どもたちは準備ができている”ということを、 活動を通して大人に見せていった」

これは、アスマンのスタッフの言葉です。アスマンは、子ども参加の取り組みとして、学校運営委員会が策定する学校改善計画への子ども参加を促進しています。子どもたちは、大人たちと一緒に活動をする準備が、大人との議論に参加する準備が、もう整っていて、いつでもできるよ、ということをお大人にアピールする機会を作っていたのです。

しかし、子どもクラブが設立されたからといって、子どもクラブメンバーをすぐに学校改善計画策定のプロセスに参加させることはしません。「でき

ない」のです。子ども側や学校運営委員側の意識や準備が整っていないのに、形から入っても成功しません。

まずは、就学キャンペーンやラリーなど、子どもクラブが自分たちでできる活動から少しずつ始めていきます。子どもクラブは、子どもの教育や学校における問題点を話し合い、活動を自分たちで計画し、実施するようになります。学校施設環境美化活動(花壇づくりなど)、不就学児童に対して学校へ通うようにとの働きかけ、教員の出欠確認、教室内での教員による体罰のモニタリングと子ども権利プロテクターへの報告、毎月の定例ミーティングなどの活動を行います。

そうして、「自分たちは、さまざまな活動を行ったり、議論に参加したりする準備ができてい」ことを周りの大人たちに示します。学校運営委員の大人たちは、少しずつ子ども参加に対する理解と認識を深めていきます。

「地域を改善する取り組みとして、大人が気づかなかった点を子どもが挙げたのに感心した」

A

「子どものアセスメント結果や子どもクラブ活動を見て、子どもの能力やポテンシャルに気づかされた」

と語るのは、プラン活動地域のコミュニティ開発フォーラムのメンバーです。事例で紹介したように、いまでは子どもの意見を尊重し、子どもを活動の担い手として認識している各委員会の大人メンバーですが、そこまでには長い道のりがありました。

まず、子どもたちは、子どもクラブの活動を通して、自分たちで話し合い、意思決定し、計画し、責任を持って行動を起こすことを学びます。この経験を通して自信が付き、効力感や自己肯定感が増していくのです。

最初に行ったコミュニティ・アセスメントでは、自分たちで話し合った地域の問題点を、大人メンバーに発表する機会がありました。大人のなかに

は、子どもグループの発表を聞いて、子どもたちがしっかりとコミュニティのことを認識していることや自分たちは気づかない視点があることに気づく人もでてきました。大人と子どもと一緒に話し合うのは難しい段階でも、あるテーマやトピックについてそれぞれの考えを共有し合う場を持つことで、大人の子どもに対する見方や考え方を変えていく布石になるのです。

大人メンバーは、子どもの権利や子ども参加に関する研修を受けながら、子どもたちが地域のために取り組む姿や成果を目の当たりにします。そして、子どもたちの発表や活動を見ていくうちに、「子どもでもできる」という実感を持ち、大人たちの間で子どもを受け入れる態勢ができていったそうです。コミュニティ開発フォーラムに、実際に子どもクラブメンバーが参加したのは、フォーラム設立後数年経ってからです。プランは、それぞれの側に準備や受け入れ態勢ができてきた時機を見計らい、初めて一緒に話し合う機会を作ります。このように、時間をかけ準備していき、子どもが大人と協働できるような環境を醸成していくのです。



地域の年間計画の実施状況を一覧表にして報告する子どもたち。大人は、子どもが無視できない存在であることを実感する。

2.事業を進める

子ども参加を促すポイント

準備	地域との関係づくり	徐々に溶け込み、地域を把握。地域活動に関心を示す子どもや女性を見つけ出す。
	子ども参加への合意	地域の大人から、子ども参加の意味や重要性について伝え、子ども参加を含めたプロジェクトアプローチの合意を得る。
	共通認識を持つ	子ども参加やプロジェクトのテーマについて、計画時から議論を重ね、NGO スタッフ、子ども、住民と共有認識を持つ。
	責任の明確化	子ども、親、教員、学校、それぞれが果たすべき責任を明確にして、活動や子ども参加を実践していく。
	子どもたちの組織化	最初に学校で子ども組織をつくり、活動を始める。その子どもたちを中心に、地域の子どもの組織づくりを促す。
	子ども参加を促進する仕組みをつくる	子ども参加を可能にする地域の支援体制(地域グループ、学校関連委員会など)をつくる。 地域の支援体制強化。子どもと大人、大人同士の取り組み・連携を促す。
アセスメント		大人と子どもがそれぞれ、地域の調査を行う。
		それぞれ実施した調査結果を、一堂に会して結果を共有する。

実施	計画づくり	子どもグループは、参加型ツールを活用しながら、地域の問題やその原因について話し合いをすすめる。地域のリソース、活動資金、緊急性を考慮しながら、地域で取り組むべき課題の優先順位を決める。
		子どもグループが自分たちの活動に関する開発計画をたてる。
	キャッチ・フレーズ	地域全体を巻き込むとき、地域の人言葉で、わかりやすく実感が伴うキャッチフレーズで（キャッチフレーズづくりは地域との継続した議論のもとに）。
	議事録を残す	子どもの「声」が忘れられないように、子どもの発言や提案を文書に残す（委員会の議事録など）
	継続的な活動	子ども参加を継続・発展させるために、子どもクラブは、定期的なミーティングを開催する。
		子どもたちが自分たちで話し合い、意思決定し、計画し、責任を持って行動を起こすサイクルを継続的に実施していく
ふりかえり	子どもクラブは、自分たちの一年の活動をふりかえり、翌年の活動計画をたてる。	
意思決定への参加	最初、大人と子どもはそれぞれに活動する。互いに協働の準備（理解や姿勢）ができてきたら、地域の意思決定に子どもの代表が直接参加できる場（大人との委員会への参加など）を設ける	

2-1 準備

地域との関係づくり

徐々に溶け込み、地域を把握。地域活動に関心を示す子どもや女性を見つけ出す。

地域で活動を開始する前に不可欠なのが、住民との信頼関係をつくることです。



スラムの路地の茶店

ブランはそれを地域への「溶け込み(Immersion)」と呼び、スタッフが毎月費やして住民との親睦を深めながら地域を把握していきます。なお、ブランが支援活動を行うことは、事前に自治体から住民に伝えられています。

数人のスタッフが週に3回前後地域を訪問し、1日のコミュニティの動き、子どものリスクの特定、また住民との立ち話や観察を通して仕事や収入活動、住民間の力関係などを把握していきます。また、地域開発活動への住民の興味を喚起し、関心を示す子どもや女性を確認します。

アスマンは村に入り情報収集しながら、政治的なキー・パーソン、教員、村開発委員会のリーダー、政府機関関係者と会合を持ち、次の点を伝え、関係づくりを始めます。

子どもの教育に焦点を置いた支援をする(この段階では細部の説明は省く)、支援期間、学校や村開発委員会を通じて支援を行う、コミュニティの主体的な取り組みを重視、不可触カーストなどの周縁化された人々に焦点を当てる、アスマンの活動は非政治的である、などです。この時点で、アスマンが活動拠点とする事務所の候補場所を提案してもらいます。

次に、村やコミュニティレベルで同様のミーティングを住民と行い、子どもの就学状況など子どもや村の状況を把握するためのベースライン調査を実施します(調査については「組織と人の準備」参照)。

子ども参加への合意

最初に地域の大人に子ども参加の意味・重要性を伝え、子ども参加を含めた支援の合意を得る。

子どもがプロジェクトの担い手となり、意思決定に適宜参加していくには、地域の有力者や親、大人たちに、最初に合意を得ることが前提です。男性優位社会の場合、有力者から十分な了解を得ることは絶対条件で、順番を間違えるのは致命的です。

アスマンも同様に、最初にキー・パーソンからの合意を得ています。

共通認識を持つ

子ども参加やプロジェクトのテーマについて、計画時から議論を重ね、NGO スタッフ、子ども、住民と共有認識を持つ。

教育の質向上に取り組むにあたり、いきなり「子ども中心の教授法」といったものを外から持ち込んでも、1つの教室に100人の児童を抱えて授業をしている現場とは大きな乖離があります。

SCJ とアスマンは、子どもや親の声に基づいたものであって初めて実を結ぶことが期待できると、考えました。そうであってこそ、子どもの参加を大きな柱として取り組んでいく NGO スタッフにも自信が生まれるのです。

責任の明確化

子ども、親、教員、学校、それぞれが果たすべき責任を明確にして、活動や子ども参加を実践していく。

アスマンが教育の質向上に取り組むにあたり、「教育の質」とは何かを模索するなかで、子どもエンパワーメント委員会のメンバーが、「教師と生徒は、医者と患者の関係と似ている。治療をしても治らなければ良い医者とはいえない。同じように、教師が教えても生徒がその知識を使えなければ、いい教師とはいえない。質の高い教育を実現するには、生徒、教師、学校、親、それぞれが自分の責任を果たすべき」と発言しました。

これを聞いた SCJ ネパール事務所長は、どんな責任があると思うか、子どもたちに聞きました。

生徒(子ども)：出席をする、先生の話に集中する、わからなければ質問する。

教師：きちんと出勤する、わかりやすい授業をする。

親：最低限の文房具を子どもに与える、宿題は家事の前に終わらせる、親も教育を受ける(そうでないと子どもの宿題を見られない)。

SCJ とアスマンのスタッフは、この発言に感嘆し、同時にひらめきを得ました。これまでアスマンは、教育の質の概念化をアドボカシーや意識向上など活動ベースで考えていましたが、抽象的なものでした。しかし、子どもたちは、子どもたちが質の高い教育を受けられるためには、誰が何をするのかをわかりやすく示したのです。

これは、権利基盤型アプローチの観点からも適うものであり、関係者の責任を明らかにすることにより、これまでアスマンがその強化に力を注いできた地域の支援体制・組織の機能も活かせるようになります。

子どもたちの組織化

最初に学校で子ども組織をつくり、活動を始める。その子どもたちを中心に、地域の子どもの組織づくりを促す。

SCJ とアスマンのプロジェクトでは、学校と地域、それぞれ子どもたちの組織化を行います。まず、ネパールの教育政策に定められている学校の子どもクラブ組織化を働きかけ、その次に地域です。

まず、アスマンが学校運営委員会、PTA の能力強化支援と子どもクラブに支援することを、学校側から合意を得ます。そして、アスマンのフィールド・スタッフが1～4年生に、アスマンの活動の考え方、子どもの権利、子どもに関する課題、特に教育に関する問題や学校の環境について授業を週1回行います。

数回授業を行った後、子どもたちに、例えば不就学の子どもの問題な

ど彼ら自身でできることはないか問いかけます。そして時機を見て、子どもクラブのアイデアを紹介します。

子どもクラブのメンバーは、子どもや教員の推薦も得て選ばれます。教員は成績優秀児童を推薦する場合がありますが、必ずしも積極的でないこともあり、アスマンは成績を条件にしません。設立された子どもクラブは、月1回ミーティングを行い、活動を開始します。

学校での子どもクラブ設立後、約1年後に、いくつかの学校の子どもクラブを集め、地域での子どもエンパワ

ーメント委員会設立のアイデアを子どもたちに投げかけます。この頃には、子どもクラブで活動をしている子どもたちも、子どもに関するさまざまな課題について理解を深めており、学校では解決しない子どもの問題に関しても意識が高くなっています。

アスマンから強要は一切しません。あくまでも子どもたちの関心と意欲を前提にします。その結果、ダムラ村の子どもエンパワメント委員会の例では、子どもから子どもエンパワメント委員会設立を、親や地域の人に提案しました。

地域で子どもを組織化したのが、プランのケースです。

子どものグループが最初に取り組むのが地域の調査で、その後も定期的にミーティングを開き、勉強会や自分たちのできることから活動します。その子どものグループが正式にコミュニティの開発委員会の一機関「子どもクラブ」として承認されるのは、1年から数年経ってからでした。「一家族

子どもたちの組織化の流れ(アスマンの例)

学校側(校長など)と支援の方向について合意する
小学 1~4 年生に週 1 回授業を実施(子どもの権利、子どもについての課題など)

学校での子どもクラブを提案。設立へ
子どもたちに準備ができた頃(約 1 年後)、地域に
子どもエンパワメント委員会を設立



子どもエンパワメント委員会の部屋

からひとりの子どものみ」「9歳～18歳の子ども」が参加ルールとして設定されています。2009年1月現在、各子どもクラブには30～40人の子どもが所属し、設立時から在籍する子どもも多いのです。子どもクラブに参加した動機はさまざまでした(右のカコミ)。

「どうして、子どもクラブに入ったの？」
興味があったから 友達に誘われて
兄が入っていたので、その兄の後を継いで
父親が委員会メンバーだったから
子どもクラブの活動(ドラマや歌)を見て、一緒にしたいと思ったから 子どもに関する問題を解決したいと思って 親とのコミュニケーションを解決したくて
満足のいかないことが多かったから

子ども参加を促進する仕組みをつくる

子ども参加を可能にする地域の支援体制(地域グループ、学校関連委員会など)をつくる。

地域の支援体制強化。子どもと大人、大人同士の取り組み・連携を促す。

プロジェクトのなかで、子ども参加を効果的に促進するには、子ども自身による準備はもちろん、地域の親や大人への働きかけ、仕組みづくりを同時に行うことが大切です。

プロジェクトの初期段階で、アスマンは、中央・地方行政とも連携し、地域での支援体制づくりに取り組みます。これは、子どもたちや住民が主体的に行動を起こし、自分たちの問題に取り組んでいくことを重視した SCJ とアスマンのアプローチの鍵となるものです。

具体的には、地域で子どもや女性、青年など、それぞれフォーラムと呼ばれるグループの組織化、そしてこれら地域レベルの組織と学校運営委員会、PTA、教員フォーラム、村議会、子どもの権利保護のためのフォーラムが互いに連携し合えるような、子どもの教育を支援するための体制をつくれます。事例のダムラ村子どもエンパワーメント委員会も、識字クラスなどの活動を実施していくにあたり、子どもを学校に行かせていない親たちの説得を根気強く行いました。その際に女性フォーラムや親との連携が不可欠だったと語っています。

2-2. アセスメント

大人と子どもがそれぞれ、地域の調査を行う。

それぞれ実施した調査結果を、一堂に会して結果を共有する。

支援対象の地域の現状把握・分析をするのに、地域住民が自分たちでアセスメントを行います。

ブラン・バングラデシュの場合、子どもと男性、女性グループそれぞれがコミュニティアセスメントを実施します。コミュニティにおける問題は何か、その問題の原因は何か、コミュニティにはどのようなリソースがどのような場所にあるのかなど、参加型ツールを活用しながら、それぞれでコミュニティの抱える問題やリソースを特定し、意見を出し合います。そして、地域のリソース、活動資金、緊急性を考慮しながら、地域で取り組むべき課題の優先順位を決めるのです。その後、一堂に会して、それぞれのアセスメント結果を共有する機会を持ちます。この場には、他の地域住民や行政関係者、NGO なども参加して、アセスメント結果を確認しながら、情報をより信用性の高いものにすると同時に、地域の合意も得ます。また、地域の大人のなかには、子どもグループの発表を聞いて、子どもたちがしっかりとコミュニティのことを認識していることや自分たちは気づかない視点があることに気づく人もできます。



5年前に子どもたちが地域をつぶさに調べた地図(左)と今の状態(右)。大人たちは、子どもたちの視点から地域を見つめ直した。

2-3.実施

計画づくり

子どもグループが自分たちの活動に関する開発計画をたてる。

プランが支援するパウニアバッドスラムの子どもクラブは、コミュニティの調査を踏まえ、子どもに関する問題で自分たちが取り組めることを話し合い、計画を立てます。啓発活動に使う歌や芝居の内容も自分たちで考えます。経験を十分積んだ現在では、前年の活動のふりかえりを反映させ、各ブロックでどのような活動が必要か、自分たちで計画します。

キャッチフレーズ

地域全体を巻き込むとき、地域の人の言葉で、わかりやすく実感が伴うキャッチフレーズで

(キャッチフレーズづくりは地域との継続した議論のもとに)。

SCJとアスマンは、以前の活動地では主に就学率向上を目指して住民と活動していました。アスマンの原則¹にある、児童労働の全面廃止と全ての子どもが学校に通うことを村の目指すこととして話し合ったところ、村の女性が言いました。

「つまり、子どもを労働ではなく学校へでしょ?!」

(英語では Getting children out of work and into school)

それはプロジェクトの核心を端的に表現した言葉だったので、SCJとアスマンはすかさずプロジェクトのキャッチフレーズにしました。子どもにも大人にもわかりやすく納得できるキャッチフレーズは、すぐに浸透しました。

¹ アスマンの5つの原則： すべての子どもは正規の学校に通い、規定の全クラスに出席する。学校に通っていない子どもは、児童労働をしている子どもである。あらゆる労働や仕事は、子どもの全体的成長と発達にとって害となるものである。児童労働は全面的に廃止されなければならない。児童労働を正当化しないいかなる理由も、糾弾する。

児童労働ゼロの村キャンペーンや就学キャンペーンの参加者は、このキャッチフレーズを口にしながらかつた様々な活動をしたそうです。現在のプロジェクトでも、子どもや住民との話し合いから、キャッチフレーズとなるような表現が生まれつつあります。



子どもエンパワーメント委員会の

メンバーとアスマンのスタッフ

議事録を残す

子どもの「声」が忘れられないように、発言や提案を文の議事録など)。

バウニアバッドの子どもクラブは、地域を調べた結果や優先順位をつけた地域の課題、自分たちの活動の振り返り・評価などを大きな紙に書き出します。これは、各委員会の代表と子どもクラブ代表(4 - 6人)で構成させるコミュニティ開発フォーラムで発表する時にも利用されます。また、コミュニティ開発フォーラムでは、月1回ミーティングを開きます。ミーティングの進行役は毎回決めることになっており、子どもメンバーも進行役を担います。話したい人は挙手し、進行役が指した人が話することができるという、話し合いのルールを決めています。ミーティングでは、各委員会からの報告のあと、その月の議題や問題などを話し合い、それらが毎回議事録としてノートに記録されます。議事録には、参加者名、各委員会からの報告、話し合ったこと、決定事項、が記載されています。

継続的な活動

子ども参加を継続・発展させるため、子どもクラブは定期的なミーティングを開催する。

子どもたちが自分たちで話し合い、意思決定し、計画し、責任を持って行動を起こすサイクルを継続的に実施していく。

バウニアバッドスラムは6つのブロックがありますが、各ブロックに住民組織と子どもクラブがあります。子どもクラブの参加人数は25~40名弱と

さまざまですが、多人数のところは同じブロックに 2 つ子どもクラブが設立している場合もあります。ジェンダーバランスはとれており、女子メンバーの数が多き子どもクラブもあります。子どもクラブは、委員長、副委員長など 7 つの役割があり、毎年子どもたち自身が選出します。

子どもクラブの活動は、子どもたちが立てた 1 年計画をもとに実施されます。歌や踊り、芝居を通しての啓発活動のほか、出生登録などのモニタリングなども行っています。計画、実施、ふりかえりのサイクルが定着しています。

SCJ とアスマンの活動地でも、学校の子どもクラブ、村の子どもエンパワメント委員会は、月 1 回の定例ミーティングのほか、四半期に 1 回フォローアップミーティングを実施します。ミーティングでは、活動の進捗や計画の見直しが話し合わせ、アスマンのフィールド・スタッフは子どもたちの知識、態度、実践などの観点からモニタリングをします。

ふりかえり

子どもクラブは、自分たちの一年の活動をふりかえり、翌年の活動計画をたてる。

バウニアバッドスラムのコミュニティ開発フォーラム、子どもクラブはそれぞれ、1 年の振り返りを行います。何が達成されたのか、どのような変化があったのか、何がまだ問題なのかを、レーダーチャート²やHフォーム³、SWOT分析など、視覚的に共有できる様々な参加型の分析ツールを用いながら振り返り、次の年の活動計画に反映されます。

² レーダーチャート： 評価手法のひとつ。計画の段階で掲げた活動目標ごとに現時点での達成度を図る。見た目から「くもの巣」とも呼ばれる。

³ Hフォーム： 分析や評価手法のひとつ。アルファベットのHを大きく描き、子どもクラブの強みや弱みを分析したり、課題に対する達成度を図りながら、要因を分析したりするのに使われる。

意思決定への参加

最初、大人と子どもはそれぞれに活動する。互いに協働の準備(理解や姿勢)ができてきたら、地域的意思決定に子どもの代表が直接参加できる場(大人との委員会への参加など)を設ける

子どもたちは、子どもクラブの活動を通して自分たちで話し合い、意思決定し、計画し、責任を持って行動を起こすことを学びます。この経験を通して自信をつけ、効力感や自己肯定感が増します。

一方、大人たちが、子どもに対する否定的な固定観念や厳しくしつけるような態度を変えていくには、子どもたちが地域のために取り組む姿や成果を見せていくことが大切です。

プランは、それぞれの側に準備や受け入れ態勢ができてきた時機を見計らい、一緒に話し合う機会を作っていきます。もちろん、意思決定の話し合いの場に子どもが参加するからといって、最初から全てうまくいくわけではなく、時間と努力、忍耐が必要です。

「コミュニティ開発フォーラムのミーティングに参加し始めた当初は、子どもが参加しているのが、なんだか形式的な感じがしました。でも、ミーティングを重ねながら子どもが意見を言うていくうちに、大人メンバーが認め始めるようになりました」

と、子どもクラブメンバー。いまでは、子どもたちにとって、コミュニティ開発フォーラムは自分たち子どもの声を正式に聴いてもらえる大切な場だと言います。

また、コミュニティ開発フォーラムの代表者は、「子どもが大人と協働することは、未来の世代を育てることであり、地域にとって重要な取り組みである」と語っています。



学校で安全な飲み水を確保する。大人と子どもの話し合いによる成果の一つ。

3.子どもに働きかける

子ども参加を促すポイント		
研修を通して	セルフエスティームを高める 価値観を育む	子どもたちが、セルフエスティーム、集団のなかでのコミュニケーション能力、協調性を高めることができるようなワークショップや研修の機会を定期的に持つ。
	研修のファシリテーション	子どもたちがお互いの意見を聴き、話し合う場を通して、課題への気づきが促され、それ一般化し、行動のための計画を立てられるようにする。
	大人の参加	子ども対象のワークショップや研修に、リソースパーソンや運営母体として地域の人たちに参加してもらう。
		大人と子どもが一緒に参加するワークショップの機会を持つ。
研修の内容	子どもを組織化するまでに、十分な時間をかけて子どもが学ぶこと。[子どもの権利、プロテクション、子ども参加、子ども・大人の役割など]	
活動を通して	参加のレベル	最初は子どもたちができることから始める。その参加が下のレベル(p14～15参照)でも悪いことではない。
	活動の特性	子どもの活動に楽しさ、娯楽性があること
		子どもの関心、興味に沿ったテーマ、内容で行う
		子どもの集まりやすい場所、時間を考慮する
	活動プロセスのファシリテーション	活動プロセスファシリテーションの基本は、「まかせる」こと。
話し合いや分析のためのツール	視覚的に皆で共有しやすい参加型ツールを活用しながら、話し合いを活性化させる。	

3-1 研修を通して

ワークショップや研修は、子どもが自分自身に自信を持ち、さまざまなイシューに対する気づきを促し、物事に主体的に取り組む態度やスキルを育むことができる機会です。

例えば

安心して話し合うことができるように話し合いのルールをつくる
お互いによく聴く
作業グループでの話し合いは、進行係、時間管理役、発表など役割を決める
自分たちの決めた基準で優先順位を決める
情報を整理し分析する、議論する
意思決定をする
自分たちの結果を評価する

など社会的スキルを伸ばすことができます。また、スキルだけでなく、子どもの権利や子ども参加を始めとする知識、そして自信や主体性、他者尊重などの態度を高めていくことを目的とする初期段階のワークショップや研修は、実施する側の入念な準備が求められます。

セルフエスティームを高める、価値観を育む

子どもたちが、セルフエスティーム、集団のなかでのコミュニケーション能力、協調性を高めることができるようなワークショップや研修の機会を定期的に持つ。

チャイルド・ファンドやワールドビジョン(以下 WV)の事例は、子どもの価値観や態度を育むプログラムの好例です。子どもたちが様々な機会に参加していく上で支えとなる、自尊感情や肯定的な自己認識を育み、学校や地域、社会などさまざまな場で積極的に関わっていく自覚やそれに対する責任感を養うことを目的としています。参加した子どもたちの口から、

「自信が持てるようになった」「他者を尊重する」「分かち合いの大切さを学んだ」「参加していて楽しい」「自分の考えが人と違っていいのだとわかった」などの言葉が聞かれます。

フィリピン、ギマラス島のチャイルド・ファンド・センター長が言うように、子どもたちのなかでの変化はゆっくりと起きると念頭に置いておきましょう。

自己啓発プログラムや WV の Life School の特徴は、子どもの年代別に応じた参加型やブレイメソッドの手法を用いていること、子どもたちが学んだことを段階的に積み上げていけるように組み立てられた内容、楽しさと気軽さ、ファシリテーターの質が挙げられます。

学びの環境は、子どもたちの学びの質に直接影響を与える(参考文献)

「人の言うことを聴く」「他者を批判しない」「言いたくないことは言わなくてもいい(パスあり)」など、最初に話し合いのルールを皆で出し合い、合意することも、安心感のある環境づくりに必要です。

話し合いのルールは、壁などに貼っておき、子どもたちが常に確認できるようにしておくといいでしょう。この安心感は、子どもたちのセルフエスティームを育てるひとつの重要な要素です。さまざまな調査で、セルフエスティームの高い子どもは、低い子どもに比べて積極的に行動するという結果が出ています。このことからわかるように、子どもたちのセルフエスティームを高めることは、子どもの主体性を育てていく上で極めて重要になります。セルフエスティームは、次の5つの要素から成り立っているといえます(参考文献)。

安全、安心感 自己理解、自己認識 所属とつながり

目標と責任 効力感、達成感

「安全、安心感」は他の4つの要素の前提条件であり、セルフエスティームを育むための最も基本的な土台です。安心感のある学びの場づくり、そして子どもたちの間の共通基盤づくりは、最初に取り組むべきものです。

研修のファシリテーション

子どもたちがお互いの意見を聴き、話し合う場を通して、課題への気づき
が促され、それを一般化し、行動のための計画を立てられるようにする。

「Media is Message」¹ メディアは情報伝
達する手段だが、そのメディア(手段)自体
がある種のメッセージを伝えている。つまり、
ワークショップの内容のみならず、ファシリテ
ーター自身の態度や学びの環境が、子ども
たちに大きな影響を及ぼすのです。ファシリ
テーターの一貫した受容の態度と、一人ひ
とりの子どもを尊重する姿勢は、子どもたち

に安心感を与えるばかりでなく、見習うべきモデルともなります。WVのLife
Schoolでは、子どもたちに接する先生の資質を明確に挙げています(p42
参照)。



ワークショップ
の様子

チャイルド・ファンドの地域センターが力点を置いているのは、まず子ども
を実施するスタッフが強いコミットメントを持ち、自己啓発プログラムの意義
を信じることです。プログラムを通して、子どもたちが肯定的な価値観を育
み変わっていくことをスタッフ全員が確信しているといえます。そして、効果
的なファシリテーションのためのトレーニングと、仲間同士で行う実践とふり
かえりも継続的に行います。自己啓発プログラムのワークショップでは、ファ
シリテーターは常に子どもたちに対して「問い」を發します。問いかけをする
ことにより、子どもたちの話し合いの広がりや深まりを与えたり、活性化したり
するのです。子どもの発達段階を考慮しながら、子どもたちが身の回りのさ
まざまな問題やイシューに関して理解を深め、主体的な行動につながるよう
なプログラムの展開が大切です。

¹ マーシャル・マクルーハンのメディア論 「Each medium, independent of the content it mediates, has its own intrinsic effects which are its unique message. (メディアそれ自体が、ある固有のメッセージを含んでいるということ)」 <http://www.marshallmcluhan.com/main.html>

大人の参加

子ども対象のワークショップや研修に、リソースパーソンや運営母体として地域の人たちに参加してもらう。

大人と子どもと一緒に参加するワークショップの機会を持つ。

子どものグループや組織が勉強や活動を進める際に、NGO スタッフだけでなく、地域の人もリソースパーソンとして巻き込んでいくことも大変有効です。インドのケララ州で 10 年以上実施されている LSTD では、地域の人たちがその実質的な運営を担っています。地域のリーダーをはじめ、学校教員、NGO、ユースクラブが中心となり、LSTD の実行委員会を結成します。会計、広報、エンターテイメント、プログラムなどの各種委員会を設け、会場、予算の計画、参加する子どもの登録、先生の選考、財源の確保、地域への広報などのあらゆる準備や本番の 5 日間プログラム実施を担うのです。行政機関との連携も不可欠で、可能な場合は実行委員として LSTD に関わってもらいます。このようにコミュニティが主体的に LSTD 実施プロセスに関わることで、地域における継続的な LSTD 実施が可能になります。

チャイルド・ファンドの自己啓発プログラムでは、子どもたちの学びをさらに深めるために、コミュニティの人がそれぞれの専門分野でリソースパーソン及びトレーナーとして関わる場合があります。例えば、次のようなケースがありました。一連のワークショップで地域環境の大切さや環境保全について学んだ子どもが、実践に移すために、たい肥をつくろうと計画しました。チャイルド・ファンドは、以前プロジェクトでたい肥づくりのトレーニングを受け実践を続けている地域の人をトレーナーとして依頼しました。そして、その人が子どもたちにたい肥づくりの実践をトレーニングしたのです。また、家族を思いやることの大切さを学んだ女の子が、病気の父親を看病したくても、お金がなく薬が買えないという問題に直面しました。そこで薬草を煎じて飲ませる案が出たのです。すると 5 人の女性が、子どもたちに薬草の見分け方や煎じ方を具体的に教えたのです。

研修の内容

子どもを組織化するまでに、十分な時間をかけて子どもが学ぶこと。

[子どもの権利、プロテクション、子ども参加、子ども・大人の役割など]

ワークショップや研修の内容は、テーマや目的、年齢、時間などに応じて企画します。子どもの権利について、子ども参加の意味や重要性、必要性、そして子ども・大人の責任と役割についてなどを、自分たちで考える機会を持ちながら学ぶことは、子ども参加実践のための心の準備をすることになります。アスマンのフィールドスタッフは、子どもクラブを設立するまでに、6 か月から 1 年以上じっくりと時間をかけて、子どもたちに対し、子どもの権利、プロテクション、子ども、大人の役割等について学ぶ研修やミーティングを実施します。チャイルド・ファンドの自己啓発プログラムでは、子どもの発達段階に合わせて、それぞれの年代グループの精神的・情緒的ニーズ、社会的文化的ニーズなどをワークショップの内容に反映させています。

子どもの集まりやすい場所、時間を考慮する。

定期的を実施するワークショップや研修では、子どもたちが集まりやすい場所、曜日や時間帯、所要時間を考慮する必要があります。

WV の Life School は、学校が夏期休暇の間の 5 日間で実施されます。泊りがけではなく、村のなかの広い場所で行われます。オープンな場でコミュニティの人も好きなきに参加できるという気軽さがあります。

チャイルド・ファンドの子ども対象に行われるワークショップは定期的に週末開催されます。コミュニティでのイベントなどが重なる場合などは、ワークショップの日程を柔軟に変更します。子どもと大人と一緒に参加する大人数のワークショップは、みんなが集まりやすい12月や学校が始まる前、夏休み中に行います。

場所も交通機関などのアクセスなど考えながら、コミュニティプラザやバスケットボールコートを利用するなど、オープンな場を利用します。



WV の Life School

3-2 実践を通して

子どもクラブでの活動は、他では学べないスキルや経験を得る重要な機会になっています。特に、子ども同士での相互作用や仲間との協働を通して、子どもは自己概念を形成していき、また帰属意識も持つようになります。「帰属の意識があってはじめて、子どもは自分のため、また自分のコミュニティのためによく働くことができる」(参考文献)のです。また、子どもクラブの活動プロセスにおいて、NGO は子どもの保護に十分配慮することが必要です。

参加のレベル

最初は子どもたちができることから始める。その参加が下のレベルでも悪いことではない。

アスマンのリーダーが語っていた言葉です。アスマンは、子どもたちが興味・関心があり、その時の子どもたちのレベルに合わせた活動(p14～15「参加のはしご」参照)から子どもクラブが取り組むのを促しています。就学キャンペーンやラリーなどの活動でも、自分たちが計画し、実行することによって、子どもたちの中に達成感が生まれます。この達成感の積み重ねが、子どもたちの自信につながっていきます。「努力すれば、あるいは行動すれば、環境に好ましい変化をもたらすことができるという見通しとそれにとまなう感情(自信)を「効力感」とよぶ。効力感とは自分が有能であると感じ、ないし自己への信頼ともいえる。」(参考文献)

子ども参加を促進していく上で、子どもたちがこの効力感を感じることは極めて重要です。効力感が高いほど、子どもの活動や参加意欲は高まります。バウニアバッドスラムで、子どもと大人がパートナーとして協働している背景には、子どもクラブのメンバーが活動経験を通して得た効力感を強く持っていたことも大きな要因のひとつです。

活動の特性

子どもの活動に楽しさ、娯楽性があること。

子どもの関心、興味に沿ったテーマ、内容で行う。

子どもたちが意欲を持って取り組みを継続していくには、やりがいの他に楽しさを感じることも重要です。意味のある活動でも、義務的に感じてしまうようでは、取り組みも長続きしないし、新しい子どもメンバーも入ってこないかもしれません。また、活動に娯楽性があることにより、大勢の地域の人たちが子どもたちの活動を受け入れやすいメリットもあります。

パウニアバッドの子どもクラブは、コミュニティのお祭りなどの機会を利用しながら、歌や踊り、芝居を地域の人たちに披露します。これらのテーマは、子どもが早くに結婚させられてしまう問題、学校での体罰と子どもへの影響、栄養不良と家庭の問題など、地域で実際に起きている子どもに関する問題を取り上げています。



「学校へ行きたい。
でも…」

例えば、学校での体罰と子どもへの影響に関する芝居では、子どもを頭から叱りつけ、体罰をする先生と、子どもの声をよく聴く先生という対照的な場面を交互に見せながら、家族の看病でしばらく学校へ行けなかった女の子が勇気を振り絞って行ったところ、厳しい先生に叱責や体罰を受け、結局学校へ通えなくなるというストーリーがあります。セリフは一切なく、生演奏で効果音などが出されます。最後に、学校へ通えない女の子が赤い大きな布を観客に見せ、幕が閉じました。そこには、「学校へ行きたい。でも…」の文字。

娯楽が少ないスラムにおいて、子どもクラブが入念に準備する歌や踊り、芝居は、地域住民にとって大きな楽しみだといえます。娯楽性の高い歌や

踊り、芝居を啓発の手段とすることにより、大人や子どもにもメッセージが伝わりやすくなる効果もあります。

しかし、このような内容の表現の仕方については大変慎重を期するといえます。「子どもによる啓発活動が目指す変化に対して大人たちの理解も子どもたちと同じレベルに達していないと、両者の軋轢が生じ子どもたちへのリスクを生み出す。(中略)子どもたちの観察力が隠されていた問題を顕在化させたり、提案する解決策が大人の不利益につながるとき、コミュニティ内での子どもの安全・保護のために、大人への対応処置にも十分な配慮が必要である」とプラン実践報告書(参考文献)にあります。例えば、体罰を日常的に行う教員の姿を描くにしても、教員という立場などを考慮した上で、問題をストレートに前面に押し出すのではなく、工夫するところにファシリテーターの力量が問われると言います。



出席者数が日々記録され、コミュニティに報告されている。大人たちの教育への関心が高まっている。

活動プロセスのファシリテーション

活動プロセスファシリテーションの基本は、「まかせる」こと。

前出の「研修のファシリテーション」と基本は同じです。子どもたちの習熟のレベルにもよりますが、プランの活動プロセスをファシリテートする基本姿勢は、子どもたちに「まかせる」ことです。コミュニティの一員として自分たちは何に取り組みたいのか、どう行動に移せばいいのか、そのプロセスを子どもたちが自分たちで進めていくことができるように支援します。子どもの準備レベルにもよりますが、子どもたちが経験を積むのに従い、プランの介入度合いは低くなります。そして、地域の大人が子どもたちの活動を適切にサポートできるように支援するのも、全体のプロセスをファシリテートしていくプランの役割です。最終的には、子どもや大人が協働しながら、コミュニティが

財源やリソースを確保しながら問題解決の取り組みを自立して進められることにつながっていきます。

話し合いや分析のためのツール

視覚的に皆で共有しやすい参加型ツールを活用しながら、話し合いを活性化させる。

子どもたちの話し合いに限ったことではありませんが、複数から大勢が集まって話し合いをする際に、参加型ツールを活用すると、話し合いが視覚化でき、話し合いに広がりや深まりが期待できます。大事なものは、一人ひとりの子どもが緊張することなく、自分の考えや意見を気軽に言えることです。それを手助けする一つの手段として、参加型ツールを使うのです。子どもたちの年齢や経験、話し合いのトピックなど考慮しながら、計画やふりかえりなどの際の話し合いをどのように進めるのが良いのか考えましょう。ツールありきではないことを十分注意してください。



コラージュを作る。これも参加のツール。

コミュニティの現状把握作業の際に、プランスタッフは、子どもたちの意見や考えを引き出し、出てきた問題の整理や分析をするための参加型ツールを活用します。例えば、「コミュニティ・リソース・マッピング」。コミュニティの地図を大きな紙に書き出し、学校やその他のコミュニティ施設、井戸、トイレをはじめ、伝統助産師、医療者、施設や人的リソースなど、さまざまなリソースがどこにあるか、状況はどうなのかを話し合い、書き込んでいきます。また子どもたちが実施した全世界帯の経済状況を調べた「生活レベルランキング」の結果も、色分けしながら、この地図に反映します。子どもの視点で考

えた村の現状がその地図ができあがるのです。また、コミュニティの抱える問題を「問題ツリー」²や「はしごゲーム」³などのツールを活用すると、問題の原因や影響、関連性、重要度など整理しながら話し合いを進めることができます。コミュニティマッピングや問題ツリーは可能ならミーティング小屋の壁に常に貼っておき、その後の話し合いやセッションで出てきた新しい視点やより明確なポイントを必要に応じて書き込めるようにしておくといでしょう。



² 問題ツリー：問題を大きな1本の木と見立て、根っここの部分には問題の原因を書き出し、広げている枝や葉の部分にその問題が起こす影響やインパクトを書く。

³ はしごゲーム：ブルンジラダシュで実践していたのは、大きな紙をはしごを描くように3つのスペースを上・中・下につくる。下段のスペースには過去3年前の子どもを取り巻く地域の状況を、真ん中のスペースには子どもを取り巻く現状、そして上段には、3年後こうあってほしいという自分たちが願う子どもの状況を書き出す。

活発な話し合いのヒント（参考文献）

何か手にとれるものを：写真、カード、箱など、子どもたちが実際に手に取ったりそれを使って何かしたりできるものを用意する

課題は明確に：「何を」「どう」するか具体的に示すこと。

少人数で：グループの人数が少なければ少ないほど、安心感が得られる。自分の意見も言いやすい。

議論の余地があるものを：意見が分かれそうなものを選ぶこと。または、子どもたちに特定の立場を振り分けて、意見の違いから話し合いが自然に発展できるようにすること。

力を合わせて：お互いの意見をよく聴いて助け合わなければならないような課題を選ぶこと。

視覚にうったえるものを：言葉に頼るばかりでなく、写真、イラスト、ポスター、統計グラフなど、ことばを使わずに考えを表現する教材を利用すること

ならべて・くらべて・えらんで・まとめて：比較対照させるため複数のもを用意すること。子どもたちに順序だてて並べたり、選んだりしてもらい、理由を説明してもらおう。

体験してから考える：まず、例えばことばを使わないゲームなど、何かをするか見るか、したあとで、「何が起きたか」「どんな気持ちがあったか」「何がわかったか」などについて、話し合い、確かめ合うこと。

難しすぎず、やさしすぎず：課題は、必ず、子どもたちがある程度背伸びする必要があるものにする。ただし、意欲をなくすほど難しいものは禁物。

練習問題

子どものための施設[子ども広場]

子ども参加をどう進める？

NGO によるプロジェクトとして、仮に子どものための施設[子ども広場]を想定し、どんな子ども参加の可能性があるのか、どんな準備が必要なのか、アイデアを一緒に考えてみましょう。

事業概要

学校教育の質が低く、ドロップアウト率が30%ほどに達する、とある国。

[子ども広場]は、学校では行われていない創作・情操面の教育とともに文化継承、学童保育などの機能を持たせ、子どもがだれでも自由に立ち寄れる居場所となることをめざしています。運営は、現地の地方政府が行い、NGO が支援しています。

当初、保護者は家の手伝いをさせようと子どもを連れ戻すこともありましたが、子どもが踊りをおぼえるなどすることで、学べる場として受けとめるようになっていきます。

課題

踊りなど目を引く活動は人気を集める一方で、子どもの遊びが多様化し、文化系活動の講座にマンネリ感が生まれて魅力が薄れ、来館者に伸び悩みが見られるようになりました。運営費の資金調達が容易でなく、職員意識向上などによる活性化が課題となっています。

子ども参加の推進と[子ども広場]の活性化を相乗的に図るならば、どの

[子ども広場]

対象：小学生、中学生

活動内容：文化系活動（図画工作・民族音楽・舞踊・演劇など）、スポーツ活動、屋外での集団によるゲーム、図書活動（貸し出し・読み聞かせ、紙芝居）、啓発活動（村に出向いてゲーム・寸劇とともに保健衛生の啓発）

開館時間：学校のない時間帯・曜日（平日夕方、土日昼間）

運営：現地の地方政府

子どもに関わる大人：職員（行政官）、講師（地域住民）

ような取り組み方が考えられるでしょうか。

取り組み
子ども参加の視点から見つめ直す

[子ども広場]は、これまで、子ども参加に取り組んでおり、子どもたちはプログラムのな

かで様々な役割を担ってきています。

現在行われている子ども参加を今一度検証し、運営主体(地方政府および現場スタッフ)と支援者(NGO)とで現状把握することに、最初に取り組みます。

子どもからの文化系活動の講座、講師への評価は、記録に残し、事業に反映させ、支援者に報告する。子ども中心に実施しているプログラムは、他の[子ども広場]との経験交流を通して波及に努めるなど、子どもたちが効力感を持てるようにし、参加意欲を高めます。

< [子ども広場]の子ども参加の状況 >

< 検証のポイント >

子どもがプログラム内容を作る・進行を担う
地域の子どもや大人に、啓発活動を行う
物語から芝居をつくり、演じる
舞踊の出張公演や手芸品づくりで施設運営費収入を得る
集団遊びなどで OBOG の高校生がリーダーをつとめる
図書係をつとめ、住民に出前貸出を実施

子どもが評価を行う
講座、講師への子どもの意見・評価を職員が聞き取る
コンクールで審査員をつとめる

子ども自身はどう受けとめているか、スタッフは聞き取っているか？
子どもの意思が反映されているか？
運営費収入のための公演への参加などで子どもの意に沿わない場合、それをスタッフに伝えやすいか？

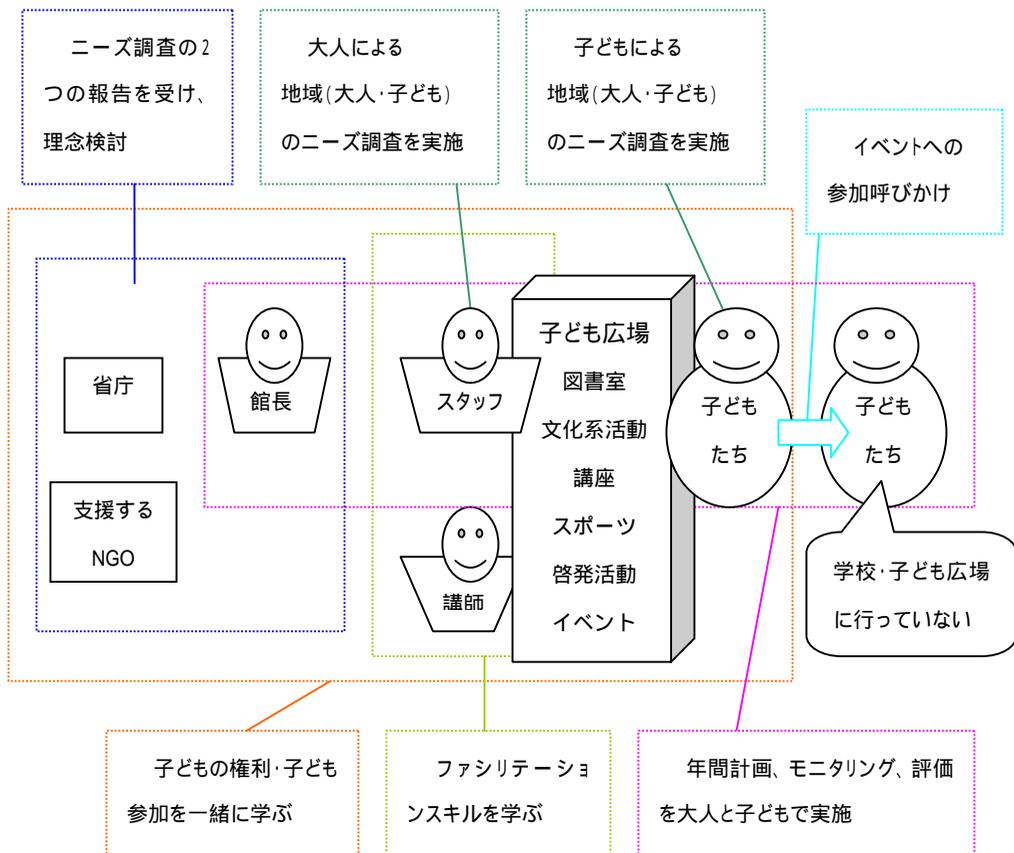
スタッフは、子どもの声を聞きっぱなしでなく、記録し、プログラムに反映しているか？
スタッフは、子どもの意見をどう反映したか、説明をしているか。

取り組み
子どもが子どもに呼びかけるしくみに

さらに、新たな
取り組みとして次の
～ を、時間を

かけて(3～5年)進める案が考えられます。

子ども参加の推進による活動の充実化のアイデア例



[子ども広場]に関わる大人、子ども(小学生から OB の高校生まで)がともに(あるいはそれぞれに)、子どもの権利・参加を学びます。その中で

「[子ども広場]はすべての子どもに開かれた、楽しめる場(人格の発達
の場)」と位置づけることから始めます()。

子どもに直接関わるスタッフ、講師は、子どもが声を発しやすくする接し
方などの技能を身につけていきます()。

地域の人々(子ども、保護者)が[子ども広場]に何を期待するか、また
「望ましい子どもの成長」についての声を、[子ども広場]の子ども・大人(ス
タッフ)がそれぞれに集めます()。子どもの参加意識を高め、スタッフに
とっては[子ども広場]活動のビジョンをしっかりと自分のものにするプロセ
スとなり、子どもからのよい刺激を受けることでしょう。

集めた声をふまえ、[子ども広場]のあり方について、[子ども広場]の責任
者(館長)と子どもに関わる官庁が同席し、支援者(NGO など)を交えて再
考し、子ども参加を柱に据えていきます()。

本格的な子ども参加の取り組みとして、[子ども広場]の子どもたちで、不
就学の子どもたちを[子ども広場](イベント参加、日常の活動、講座への参
加)に巻き込む働きかけをします()。

子どもたちが参加の実績を積み、大人が子どもの力を認めた段階で、
年間計画の決定プロセスに参加し、資金調達、事業評価も含めて、[子ど
も広場]運営の一翼を担っていきます()。

**あなたの団体でも
検証と新たなしくみづくりを**

子ども参加を進
める日々の実践は、
スムーズにいくもの
ではないことは、前

掲の事例でも示されているとおりです。スムーズにいかないからこそ、日々
のモニタリング、評価、フォローアップが重要といえます。ささやかであって
も、日々の成功体験は、そこに関わる人々を勇気づけることでしょう。あな
たの団体においても、これまでの子ども参加を検証し、新たな取り組みを
始められてはいかがでしょうか。

参考文献

ロジャー・ハート(2000) 『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』(木下勇・田中治彦・南博文 監修) 萌文社。

「南」の子ども支援 NGO ネットワーク(2003) 『国際協力 NGO のための「子ども参加実践ガイドライン」』(特活)国際協力 NGO センター(JANIC)。

グラハム・パイク、デイビッド・セルビー(1997) 『地球市民を育む学習 Global Teacher, Global Learner』(中川喜代子監修、阿久澤麻理子訳) 明石書店。

波多野誼余夫編(1980) 『自己学習能力を育てる 学校の新しい役割』東京大学出版会。

大谷美保(2007) 「開発 NGO における子ども参加型の開発 - ブラン・インターナショナルの子どもクラブの事例から」、『開発教育』54号 (特活)開発教育協会。

サイモン・フィッシャー、デイヴィット・フィックス(1991) 『World Studies 学びかた・教えかたハンドブック』(国際理解教育センター編訳) (特活)国際理解教育センター(ERIC)。

Borba, Michele (1989) *Esteem Builders: A K-8 Self Esteem Curriculum for Improving Student Achievement, Behavior and School Climate.* Jalmar Press.

- ◆ Lansdown, Gerison (2001) *Promoting Children's Participation in Democratic Decision-Making.* UNICEF Innocenti.
- ◆ Plan Bangladesh (2006) *Plan Bangladesh's Handbook on Child Centered Community Development.* Plan Bangladesh.
- ◆ Regional Working Group on Child Labour (RWG-CL) (2003) *Learning to Work Together--A handbook for managers on facilitating children's participation in actions to address child labour.* Regional Working Group on Child Labour (RWG-CL).
- ◆ Save the Children Norway-Nepal (2008) *Country Report Nepal--Children's Participation in Armed Conflict, Post Conflict and Peace Building, 2006-2008.* Save the Children Norway-Nepal.
- ◆ Save the Children Norway-Nepal, Save the Children USA-Nepal (2007) *Finding hope in troubled times--Education and protection for children in Nepal.* Save the Children Norway-Nepal, Save the Children USA-Nepal.
- ◆ Stephenson, Paul with Gourley, Steve & Miles, Glenn (2004) *Child Participation.* Tearfund
- ◆ Van Beers, Henk with Trimmer, Caspar(2006) *Adults First!--an organisational training on children's participation CRF Cambodia, 2004.* Save the Children Sweden.
- ◆ Van Beers, Henk, et al.(2006) *Creating an enabling environment - Capacity building in children's participation Save the Children Sweden, Viet Nam, 2000-2004.* Save the Children Sweden.



平成 20 年度文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業

子どもの参加を促すガイド

2009 年 3 月 発行

発行：教育協力NGOネットワーク（JNNE）

検討委員メンバー：小荒井理恵〔(特活)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン/SCJ〕、
片山信彦〔(特活)ワールド・ビジョン・ジャパン/WVJ〕、田中幸子〔(特活)国際理解
教育センター/ERIC〕、田中治彦（立教大学）、細井なな〔(特活)チャイルド・ファン
ド・ジャパン/CFJ〕、三宅隆史〔(社)シャンティ国際ボランティアセンター/SVA〕、
中村絵乃、西あい、宮崎花衣〔(特活)開発教育協会/DEAR〕

執筆：Part 1 田中治彦（立教大学文学部教授）

Part 2 田中幸子（ERIC 研究員）

Part 3 田中幸子（ERIC 研究員）

森透〔(特活)ラオスの子ども/ALC〕

写真提供：CFJ、WVJ、森透（ALC）

編集：森透（ALC）

編集協力：小荒井理恵（SCJ）、中村絵乃（DEAR）

実施：教育協力NGOネットワーク（JNNE）

事務局：(特活)開発教育協会

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41-3F

協力：プラン・ジャパン、SCJ、CFJ、WVJ、ALC



Japan NGO Network for Education

<http://jnne.org/>